

# 学 術 団 団 報

1972.10.4 再刊1号

教育の帝国主義的再編に抗し  
文化ヘゲモニーの獲得のために、新たな  
文化潮流—革命的サークル運動を前進させよう！

## 目 次

学術団団報の再刊にあたって

本部常任委員会

### 第 一 部 政治情勢と我々

#### (1) 国 外 情 勢

- (A) はじめに——序にかえて
- (B) 戦後世界体制の権力構造
- (C) 米中会談をめぐって
- (D) ニクソン防衛政策について

#### (2) 国 内 情 勢

- (A) 日帝の動向と国内政策
- (B) 新たな反動政権田中内閣の登場
- (C) 帝国主義支配秩序にむけた国内総再編
- (3) 我々の任務（前期活動総括）

### 第 二 部 学術団サークル討議資料

「サークル論考」（71年度春季L.C議案書より）

### 第 三 部 研 究 論 文

「プロレタリア独裁とコミュニオン原則」 山崎カヲル

サークル紹介

学術研究団 常任委員会

# 学術団々報の再刊にあたって

学術研究団 本部 常任委員会

全同志社の先進的学友諸君〴〵

学術団諸下諸サークルの研究会員諸君〴〵

同志社の地において新たな文化潮流—革命的サークル運動を担わんとする諸サークル研究会員諸君に、わが学術団本部より学術団々報再刊一号を奨出したいと思ひます。

現在、昨年七月一五日のニクソン「訪中」声明と一月後の「新経済政策」の発表を契機に、戦後世界体制の極めて根柢的な動搖を遂え、今年に入つては、かかる体制の崩壊になお一層の拍車をかけるべくベトナム人民の英雄な闘いを手始めに、新たな世界史を創造せんとする全世界の闘う人民の怒濤の波と、それに対し極端化された体制になお必死にすがりつき、専ら「延命の道」を求め喘ぐ帝国主義者たちとの鋭い拮抗関係の下、国内外の激動と且つ矛盾に満ちた新たな情勢があると思ひます。

今年の五月一五日の「沖縄返還」を、戒厳令下の首都東京での返還記念式典の内に、現在の沖縄の多くの矛盾を解消しつつ、本土—沖縄の反革命的統合をその手中に収めた日本帝国主義は、外に向けては公然と再度のアジア侵略反革命遂行の具体的第一歩を踏み出し、内に向けてはかかる政策を支える強固な国内体制（＝帝国主義的国内総再編成）を著々と進行させています。

まさにこのような激動する世界の新たな動向と、それに見合った形で強権的に遂行されている国内政策、

その反動の嵐とイデオロギー攻勢の前に、わがサークル戦線は多くの混乱と混迷、後退状況を余儀なくされていると思います。60年代後半、全国津口浦々の大学で広汎な学生大衆の決起をもって闘い抜かれ、日帝ブルジョアジーを恐怖のドン底に落しこめに、所謂、「全共闘運動」が、その運動の内に高度な思想性政治性社会性を獲得しつつも、国家権力の壁の前に敗北を喫し、以後「全共闘テルミドール」を迎え、一切の政治的文化的ヘゲモニー帝国主義者たちによって簞奪され、現在においては多くの市民主義的サークルの抬頭の中にあつて、わがサークル戦線の担うべく任務は極めて重要なそれとあると考えます。以上の様な状況を踏まえるならば、現在の日帝ブルジョアジーの反動的攻勢に対し、わがサークル戦線は如何にこたえていくのか、如何にそれらをのりこえた文化理論体系を構築していくのか、が緊急の課題として問われていると思ひます。

一九六五年、後の全共闘運動を生み出す多くの契機をその内に孕みつつ熾烈に闘い抜かれた早大、慶大等の学費学館闘争と同じ時、この同志社においても、当時の大きな政治課題であった日韓闘争と同時的に斗われた学館闘争の過程で、わが学術団本部と文連本部はサークル末端からの多くの大衆決起の下、サークル大衆のエネルギーを革命的に牽引し、全国の大学に先がけ学館闘争を勝利に導き、以後、日本の学生サークル戦線の一定程度の後退状況の中にあつて、その最先頭を担うべく戦闘的サークル戦線を築き上げてきたことや、又「全共闘運動」が多くのサークル活動家をその戦列に巻き込みつつ、その運動のダイナミズムをもって歴史を突き動かし、深い刻印を刻んできたことを、我々はリアルな歴史事実として知っていると思ひます。我々は、かくて我々の先達たちが、多くの血と汗を流すことによって切り拓かれた革命的サークル運動の地平を、断固、守り抜き、その意義を深く真摯に捉え返すことにより、現情況に対し深く切り込んでいくサークル戦線を構築していく、そういった任務を負っていると考えます。

我々は以上の点を充分踏まえ、団報の再刊を一つの契機にして、同志社における新たな政治的文化的ヘゲモニーを獲得するために、新たな文化潮流・革命的サークル運動を担い、学術団運動の更なる前進を克ち取っていかうではありませんか！

全世界を獲得するために //

# 第一部 政治状勢と我々

## (1) 国外情勢

(A) はじめに——序にかえつて

ベトナム・インドシナ半島に於ける革命戦争は今春からのアメリカ空軍の全面的な北爆の再開にもかかわらず、南ベトナムの解放を求める人民解放戦線（PLAF）は北部戦線での電撃的な攻勢を突破口として中部平原、サイゴン北方へと戦線を拡大し、アロン、コンツム、ユエの攻略を前に、南ベトナム人民の革命的反乱の開始、南ベトナム政府軍の敗北に続く敗北と後退、そしてその解放戦線への投降、参加といった事態を招来させ、新たな革命的地平を開くとともに巨大な前進を呈してきている。なだれをうって後退する南ベトナム政府軍を追撃し、クアンチ省、中部海岸地帯・ビンディ省etcは次々に解放戦線とベトナム人民の手に帰し、チュウ政権の支配、抑圧のくびきを断ち切った。かかるベトナム人民の春季攻勢と勝利的前進こそ、米中会談に対する回答であり、米帝とチュウカイライ政権を徹底的に追いつめるものであった。そうであるが故に米帝はハレンチにも北ベトナム港湾を機雷封鎖し、更に北ベトナム港湾内の諸外国の般船に対してまで干渉するといった露骨な反革命策謀にでたのである。そして今やインドシナの全ての人民が誰れが侵略者であり、誰れが敵なのか、誰れが味方であるのかを鮮明に理解し武器を取り進撃しつつある。米帝こそ侵略者であり、チュウ政権は米帝の侵略を隠ぺいするイ

チジクの葉にすぎないこと。そして勝利は確実に革命軍の手に帰すことを深く理解している。そして僕たちはかかるベトナム・インドシナ人民の革命的闘いに単に連帯を語ったり、声援を送ることであってはならない。それは日帝自身が沖繩返還・ニクソン・グアム・ドクトリンをして明確にベトナム・インドシニアシアの侵略反革命の後方基地化していること、そしてまた僕たちの闘いが67年十・八以降の熾烈な階級闘争の歴史的な地平をふまえねばならないからである。そしてその具体的環として、沖繩闘争のつきつける問題として僕たちに要請されている。沖繩を中心とした岩田、横田、横須賀、三沢etcの米軍基地はベトナム・インドシナ侵略反革命戦争遂行の不可欠の基地であり、日に二・三度は必ずB-52、F-4ファトム、GAギャラクシーが飛来し、艦船が出撃しているのである。文字通り沖繩闘争は国際主義の内実とともに、戦後日本の階級闘争の巨大な構造的転換を勝ちとる質を要請されている。それは、逆に言うならば、日帝が沖繩の「返還」自衛隊派兵という反革命的な政治を戦後世界体制の新たな再編とその方向性を確定する中でそれとの対決の質としてあらわれ。戦後世界は70年代に突入するとともにその新たな構造的転換を余義なくされ、解体を露骨に顕在化せしめた。それはいうまでもなく、中米会談を頂点とした国連体制の再編と、IMF・CUTT体制の破綻である。まずこの中米会談とIMF体制の破綻の分析を射程に入れ戦後世界体制の構造を概括しみる。

## (B) 戦後世界体制の権力構造

戦後世界体制は、二〇世紀に入るとともに先進資本主義国の帝国主義段階の本格化——第一次帝国主義戦争と一九一七年ロシア十月革命の勝利——プロ独社会主義の成立という世界史的規定性、そしてその後の第二次帝国主義戦争へと至る過程、及び第二次世界大戦という歴史的過程のなかに、その性格を色濃く刻印されている。そうであるが故に、我々は戦後世界体制も、帝国主義段階におけるロシア革命の勝利を起点として捉えねばならないのである。

帝国主義段階の革命党ボルシェビキ・レーニン党は第二インターの根底的批判のもとに不充分ながらも国際的党派闘争を展開しぬくなかロシア革命を 利に導き、その成果を媒介として第三インター・コミンテルンを巨大な意力をもって世界史に登場せしめた。それはまさにロシア革命——ヨーロッパ革命——世界革命戦争——世界プロ独を実現する国際的指導機関としてボルシェビキ・レーニンによって設定されつつも、わずか五年の後にはレーニンなき第三インター・コミンテルンVは変質過程を歩み、もはや世界革命を展望するどころか、第一次帝国主義戦争後の各国革命的プロレタリアートの痛苦な敗北の過程を真摯に総括することなく、ジグザグ路線とロシア—国社会主義防衛の固定化をしてハスターリニスト・レジュームVと化し、第三インターはソ連邦の国際連盟への加

盟をもって崩壊していった。そしてそのことは、第二次帝国主義戦争を阻止することを怠り、あの独ソ不可侵条約の締結をみるまでもなく、ソ連スターリニストは各国プロレタリア人民の血と死と飢えの上に一国社会主義を謳歌していったのであり、かつまた必然的に戦後革命の波をも人民戦線なるものので式化によって流産させ、それも当然ながら、連合軍の一翼を担っていたのである。そしてかかる一国ソビエト社会主義の変質過程と関連しつつ、同時に進展していったヴェルサイユ体制の矛盾の顕在化と崩壊過程は、労働者国家の存在という帝国主義ブルジョアジーにとつての恐怖を背景にしながらも、帝国主義の不均等発展と乗直分業の傾向故に、過剰資本と生産過剰による世界的金融恐怖までにおよぶ経済—体制危機は各国経済のブロック化を生み、独・日・帝 国主義のフンズマリと産軍複合体制—統制経済—戦争遂行体制の準備とともに第二次帝国主義戦争へと突入せざるをえなかったのである。かかる帝国主義戦争は国際的、国内的諸矛盾のブルジョアの解決形態として発現するものであるが、それ自身は根底的に止揚解決できるものではなく、更に大きな矛盾の拡大再生産の悪矛盾に落としめていく以外の何物でもないものであり、かかるブルジョアの△止揚Vを、一方にソ連スターリニストを安全弁として第二次帝国主義戦争を経る過程で、大きく膨張した米帝をして成されたのが戦後世界体制なのである。

以上の大きざっぱな概括により、戦後世界体制の構造を△米ソ平

和共存体制Vとして見ることは容易であろう。かかる戦後世界体制こそヴェルサイユ体制から世界恐怖を経て、第二次世界大戦の体制的危機に対するブルジョアの解決形態なのであり、ソ連スターリニストの米帝への屈服IIウラギリは云うに及ばず、ロシア革命の成果はスターリニストをして、ブルジョアに踏みならされるままとなり、各国プロレタリアートは分断化されたのである。世界の人民の屍の上に大帝国主義を築いた米帝は、ヤルタ会談における戦後処理として、A両体制Vの併立と国際連合による国家統合をもって戦後世界の再建にかかる。米帝は、各国帝国主義の大戦による荒廃と打撃を背景に圧倒的な金プールと生産力の蓄積をして、国際的協力の名のもとに、ブレトン・ウッズ機構、ガット体制を指導的に形成していった。またかかる体制の形成こそ、統一市場の防衛とあいまっての国際的革新同盟のベースとなり、米帝を軸としたNATO—安保等の軍事同盟がはりめぐらされてゆくのである。それは戦後革命の波をソ連スターリニストをして、冷戦構造として固定化しつつ、五〇年代をジュネーブ協定をして非同盟中立国（ネール、スカルノ、ナセル）の成立、第三潮流をばらみながらも、「ヤルタの密約」II米ソ共存体制から国連体制へと維持しぬきのり切る過程で成立する。まず我々は戦後世界体制IIヤルタ・ジュネーブ体制の根本的性格を見おかねばならない。それはまず第一に先述したごとく、第二次帝国主義戦争の戦後処理過程において、すでに反ファシズム体制の形成の段階から

準備されていたスターリン主義の帝国主義への屈服が名実とともに完成され、米帝と世界分割協定を結ぶことによって、社会帝国主義に転落する中に戦後権力構造が確立されたこと。そして第二に帝国主義間不均等発展の規制I危機を先取りしての歪曲形態I IMF体制（疑似国際通貨管理体制）、すなわち米帝の圧倒的経済力IIドルV、軍事力II核Vをしての国際革新同盟II統一市場防衛なのである。かかる戦後世界の構造の性格は帝国主義間、相互の恣意的協調政策に規制された危機の引きのばしと、国際侵略反革命体制の恒常的維持による国内抑圧の永続化とその先行的強化を特徴づけているのである。又、かかるなかに現代帝国主義の危機の同質性と緊密性もみておく必要があるだろう。次に我々は戦後世界体制の根本的矛盾をみてみる。それは戦後世界に存立する帝国主義の性格を以上のようにとらえたが、その規制をうけながらも、根本的矛盾はレーニンが「帝国主義」に関して指適したごとく、帝国主義国による帝国主義間の「不均等発展の法則」であり、その政治的特徴としては「民族抑圧」なのである。まさに戦後世界支配体制はこの帝国主義間不均等発展と後進国人民の抑圧という二つの根本的矛盾の拡大の中でその危機を醸成してゆくのである。そしてAはじめVにおいて記したA二つの世界史的事件Vはこの二つの矛盾のブルジョア側の側からの露なのである。

### (C) 米中会談をめぐって

我々は米中会談をブルジョアと裏がえしの同レベルの反スタ論者の云う如く中国共産党の裏切り、すなわち平和共存体制I国連体制への屈服と固定化として平面的に捉えてはならない。それは中国共産党の周辺革命論I世界革命戦略と米帝のアジア反革命戦略との角逐として基本的には把えねばならないであろう。確かに、中国共産党内における党内、分派闘争の問題、すなわち中ソ論争、文化大革命を経る過程で修正主義、スターリニスト、劉少奇一派を追放し抬頭してきた革命的左派の現在の屈服及び林彪の失脚I周恩来の全面的登場はその内部矛盾を蓄積しているが一貫として展開してきた反米帝路線を放棄することはないのであり、中国共産党はインドシナ革命勢力、及びアジア反米統一戦線との連帯と支持の緊密化を促進しているのである。しかしながら中国共産党の基本的な世界戦略であったところの、いわゆる周辺革命論は大きくその内容を変化せんとしているし、いまだ一国社会主義路線の枠内にあり、内部矛盾を更に蓄積しつつある。国連参加、米中会談と最近の中国共産党の積極外交を見るならば現在の中国共産党の世界戦略はとりわけ先進諸国においては平和共存I国家間外交を含めての平和外交を通して先進諸国内部の小ブル、平和主義者との妥協及びその吸収と親中派の拡大と形成、総じて中国共産党のヘゲモニーを強化することを大胆に打ち出し、

又後進諸国I革命勢力に対しては基本的には支持し、援助し、反帝国主義路線を貫徹するという二面的な構造をもっている。この世界戦略はソ連共産党のコミンテルン六回大会以降全面化していったスタ・ブハ綱領的な戦略ではなく中国革命を勝利に導いた中国共産党自身の経験に学びそれを世界革命戦略まで引き延ばした傾向をもつものであるといえる。たとえばA農村から都市へVというシェーマが世界の農村II後進国革命勢力に強固に連帯結合し、世界の都市II先進国を包囲し介入し、その一部と結合し吸収し拡大しつつ農村II後進国を革命の根拠地として、都市II先進国へと革命を拡大していくという具合にある。このような戦略の意義と限界はともあれ現存的なソ連共産党の一国社会主義II総和革命論の反動的固定化としての平和共存路線とは異なっているのであり、フルシチョコ以降ネオスターリニストの戦略は、生産力思想体制間矛盾論を背景に階級関係を国家間関係へとすりかえ、また平和共存路線の固定化は、各国スターリニスト共産党をして、各国階級斗争の庄殺構造を現出させる極めて反革命的なものである。さて米帝はニクソンを中国へ使わし何を夢みたのであろう。破綻につぐ破綻で悪夢に悩まされ反共包囲網をしこうとでもしたのであろうか？ いやそうではなからう、では、A第二のジュネーブ会談Vでも実現しようとしたのか？ それとも革命勢力の分解でも期待したのか？ あるいは今秋の大統領選挙へ向けての政治的プロパガンダなのか？ 等々……しかしながらそういうこと

は第二義的な問題であって、ただ我々はここに於いて戦後世界にスターリニストをして労働者国家を屈服せしめ、政治的、経済的、軍事的に一元支配を誇った米帝のすなわち戦後世界体制の解体と新たな再編過程の一契機なのであり、とりわけ米帝のアジア反革命戦略の再編と日帝をしてその強化に間接的にはあれ、その目的があったのである。そうであるが故に米中間の対立は、日帝をして根底的に顕在化するのである。すなわち、米帝はアジア戦略の肩代わりとして、日帝に対してアジアにおける反共勢力へのテコ入れと形成また市場圏の防衛を要請し、更なる帝国主義化を米帝自身妥協しながらも、過渡期世界の権力再編の質に規制されることにより、要請するのである。他方、中国共産党は日帝のアジアへの侵略、反革命、軍国主義の復活を懸念し、これに強く反撥するのである。このように米中の角逐は米中会談は、その背後に日帝の存在とともに、インドシナ革命戦争の存在が根本的な兩者は米中の政治的関係の内容を規定しているのである。すなわち米中会談は我々にとって日帝とインドシナ革命セカを軸としたアジアにおける階級攻防を解明化するなものでもないのである。

#### (D) ニクソンドル防衛政策について

一九七一年八月十五日のニクソン声明は新経済政策は戦後国際経済の枠組を形成してきたIMF・GATT体制の根本的矛盾の外化の頂点をなすとともに、新たな国際経済の解体と再編の動行

の基盤となりえたのである。しかしそれは米帝のマーシャル・プラン、トルーマンドクトリンにより大はばに増大したヨーロッパ再軍備援助や対外軍事支出etcという形態で米帝自身の手によってIMF基金を通さずにおこなわれたドル供給に支えられていた。つまり戦後の国際平価体系はイギリスのポンド切り下げと独・日の両帝国主義の世界市場復帰により50年代に安定した姿をとるがその背景に各国がドル不足という条件、何らかの形態でドル供給がなされねばならないという状況にあって、その安定性が確保されていたのである。そして西ヨーロッパ諸国や日帝が自国為替の対ドル交換性を回復し、IMF基金がその本来の機能をなす条件が準備された60年代には肝腎要の基軸為替であるドルが信用を失うという事態に突入するのである。これはIMF体制自体の全面的開花は同時にその機構の形ガイ化であるという自己否定的矛盾構造の顕在化なのである。すなわちドル危機の開始はIMF基金を媒介とする国際通貨の共同管理機関としての本来の機能とは反対にドル危機に対するテコ入れ機関へと転化せしめたのである。それは一九六〇年ロンドン金市場における金価格の暴騰を契機として始まったドル危機への国際的テコ入れとして61年以降いわゆる金プール諸国によるロンドン自由金市場での金売却操作と、それによる金価格の一オンス35ドルへの釘づけという形でおこなわれた。これは米帝の金集中がなされている間は国際的平価体系に直接的に動揺を与えず、実質的なドルの減価はこの金集中の

を鮮明化するものである。IMF・GATT体制は、第二次世界大戦を経るなかでの、米帝の圧倒的な金保有(世界の70%)と高度な生産力の発展、そして各国帝国主義の生産能力の壊滅的狀態という条件のもとに米帝自身の特殊利害として、戦前の各国ブロック経済の障壁の除去、とりわけ、スターリングブロックの打破として成立する。つまり米帝はほうだいな過剰生産力を貿易と資本の自由化によって拡散させる必要があったのであり、その機構として、IMF・GATT体制が各国帝国主義国の経済回復における米帝の援助の必要性ということもあって、米帝のヘゲモニーのもとに形成されたのである。それは確かに一九三〇年代の為替管理を通ずる差別措置として各国平価の変動とがブロック経済化と為替ダンピングとをもたらす、国際的取引関係に世界市場を分断して結局、世界資本主義の安定的発展を阻害するという反省をなし、それを克服するものとして国際通貨管理体制を指向するものであった。しかし、この「人類の英知」も一國通貨であるドルと金との交換可能という条件つきのものである。金為替本位制の枠をでるものではなかったのである。それはIMF体制が円滑に機能し得るか米帝の金プールの管理能力の如何によるものであることを意味しているとともに「管理できない管理通貨体制」なのである。しかし確かにIMF体制は50年代を通じて無差別、自由の理念は実現されなかったものの国際平価体系の安定固定化という主要目標については一定程度成果をあげ世界資本主義の発展

げにかくれて潜在的に進行することになる。しかし戦後水平間分野が積極的に推進され、各国帝国主義が50年朝鮮戦争の勃発とともに日本及びヨーロッパ資本主義の高度成長をなしてゆき、米帝の国内における物価水準の上昇にともない貿易収支の黒字幅の縮少、そしてそれにもかかわらず継続されざるをえない巨額の対外援助、軍事支出、さらにはEEC成立を契機に急増する民間資本の流出が加わり米帝の国際収支の悪化をもたらした。それは米帝の対外ドル債務残高の累増をもたらす、金保有高を超過するようになりドルに対する信用は崩壊し潜在的に進行していたドル減価の事実を露呈することになるのである。かかる状況に対処するために米帝は歴代の大統領アイゼンハワー、ケネディジョンソンをして一連の応急措置的ではあれドル防衛政策を強化しつつ成長経済を推進することにより国際競争力の育成に活路を見いださんとしたのである。だがドル危機の回壁はドル防衛政策と景気刺激は経済成長政策を同時に遂行することは、構造的にできない状態へ落ち込まれているのであり、そのことを現象的にあらわしているのがスタグフレーションなのである。そしてついに、68年に入り金プールの解体は二重価格制により71年事実上、ドルはIMF体制は、スタグフレーションにみまわれる中で崩壊していったのである。そして八月十五日のニクソン声明はドルはIMF体制のその虚構に死亡宣言を最終的に与えたものである。

## (2) 国内情勢

### (A) 日帝の動向と国内政策

5・15「沖繩への施政権返還」以降、日本帝国主義は沖繩への自衛隊派兵を敢行することによって沖繩を東南アジアへの侵略反革命の前線基地化し、同時に本土を侵略反革命の後方基地として帝国主義の国内政策をもって再編せんとしている。そのことは第一に帝国主義的復讐をもつて本土「復讐」のブルジョア的幻想をあらゆる手段を駆使してふりまき、社共人民戦線派のあらゆる復讐運動を包摂し、一挙的に反革命国民統合を成さんとするものであり、「復讐」後の沖繩をめぐる状態をして、沖繩人民の戦後二十数年に及んだ、米軍府政の差別と抑圧の専制支配からの解放を意味せず、直接支配者日帝の下での沖繩のもつ矛盾の一層の顕在化、拡大（「ドルショック」以来の通貨交換による膨大な物価騰貴、本土独占資本の沖繩への進出とりわけ公害企業の集中、沖繩労働運動の右翼的再編、労働者人民の差別分断、教育委員任命制への強権的移行、軍用地再契約による農民の土地の強制剝奪、等々）を意味するものである。沖繩の現局面は本土政府の政治、経済、社会、教育等のあらゆる面で帝国主義の新たな政策が貫徹されんとしている。第二に、沖繩―本土をめぐる帝国主義の軍事的再編と侵略反革命の軍事遂行政策である。69年米帝国主義のニクソン

ている。いまや米帝はニクソン・クマムド・クトリン・インドシナ反革命戦略の破綻と最後の悪あがきをして、北ベトナム全港湾機雷封鎖、無差別大量爆破、階級し作戦（堤防破壊、病院、各種施設の恣意的攻撃、等々）を現出せしめ、米帝の軍事的撤退と政治的敗北は三月末から開始されたベトナム人民の最後の勝利に向かっての大攻勢によって決定的になりつつある。このようななかで日帝の沖繩「返還」以降全面展開される軍事的な意味が、65年日韓条約締結以降、従来の国内経済政策を主要なものとした路線から、資本輸出をテコとした対外膨張路線に転換しそれが国際反革命勢の中の米帝の経済的地位の低下、ASPA C以降の軍事、外交政策の一程々度の表出を経る中で、いまニクソンの70年代世界戦略の破綻、インドシナ侵略反革命策動の敗北にあって、日米帝の不均衡発展を媒介的要因としつつ日米反革命同盟内部に於る再編の肩代りとして日帝自身をして「革命戦争」の地獄の中へ追い込められることである。それは沖繩―本土人民の更なる搾取と収奪と抑圧の上に侵略反革命軍事遂行の野望をなし、インドシナ、中国、朝鮮人民の巨大な反帝統一戦線に真向うから敵対することである。

### (B) 新たな反動政権田中内閣の登場

日本帝国主義の東南アジア侵略の具体的現実的な進行、政府の反動的諸政策の中心環は帝国主義軍隊―自衛隊の大量沖繩派兵

ングラムドクトリン発表以降の極東情勢、とりわけインドシナ革命戦争の勝利的前進と極東における帝国主義の軍事同盟の再編問題総じて世界の階級斗争の構造的転換情勢に規定されている。戦後ヤルタ―ジネーブ体制以降、米帝とソ連社帝を中軸とした冷戦構造、平和共存路線の進駐する中、帝国主義においてはIMF・GATTの国際金融体制、NATO、SEATO、OASなど後進国までも包摂した軍事同盟を確立し、一方ソ連社帝は56年ポーランド動乱、ハンガリー革命のスクリーニスト戦略の破綻からフルシチョフの平和共存路線の提出と露骨な帝国主義との協調を打ちだし、戦後世界の構造が米帝、ソ連社帝を中心とする国際反革命勢力による支配として展開された。更に、このような国際反革命勢力の世界支配体制の再編と強化をめぐる現下の階級攻防環にあってインドシナ革命戦争の世界革命戦争としての民族解放斗争の抬頭とその大後方としての革命中国の位置（プロ文革から現在の革命外交の展開）を見るならば、国際階級斗争、とりわけ後進国民解放斗争の煮つまりは、革命派と反革命の激動の情勢を現出せしめている。そして中米会談、ニクソン訪ソ、にかけてのベトナム人民の今春季大攻勢の勝利、7月4日朝鮮南北共同声明の発表、南ベトナム共和臨時革命政府のバリ和平会談にみられる軍事的勝利に裏づけられた政治的勝利、打ち続く世界の革命的民衆の闘いと国際的な攻防戦における勝利的前進は日米両帝国主義の侵略反革命策動―70年代世界戦略路線を粉砕する闘いへと進駐し

である。すでに数百名の自衛隊員の沖繩現地到着を敢行し、更には今秋において、大量派兵を予定している。自衛隊こそは米軍基地機能の強化、再編と米軍に代る帝国主義軍隊としての日帝の侵略戦争遂行の唯一の担い手である。同時にそのことは本土において、侵略反革命の後方基地としての軍事的整備強化を意味し、四次防、五次防の多額な防衛費の増大、全国米軍基地自衛隊基地の増大と再編、基地機能の米軍と共同の強化と直接的なベトナム戦争に加担する基地機能の合理的な徹底化（沖繩から空母やB52のベトナム出撃、岩国、横田、相模原等からの武器、弾薬、兵員の輸送、横須賀等の常時の米軍艦艇の出入港等々）更には、自衛隊官僚のサイゴン訪問等、日帝のベトナム侵略戦争加担の政策は国内に於いてますます露骨にあらわれてきている。いみじくも田中首相が提出した『日本列島改造論』こそは、日本列島をこのような侵略反革命の一大後方基地としての再編であり、国内資本主義体制の現実的な矛盾の表象―公害を全国に分散化させ、農村の更なる解体と都市の本質的矛盾の隠蔽、等々その近代主義とプラグマチズムは全国で斗っている、反基地、反公害、住民斗争に結集する多くの人民を更に斗いに決起させている。（三里塚、北富士の闘い、四日市、水俣公害訴訟裁判斗争、「新全国総 開発計画」粉砕の闘い、岩国、相模原等の反戦斗争等）

田中政権の反動性は中米会談―ニクソン訪中以降の国際情勢の中で、その外交政策路線にも明確にあらわれている。沖繩「返還」

「沖繩派兵と同時に「日中国交回復」をかけることにより、いわばメダルの裏表の政策として押し進め、日米帝共同の反革命的策動として、中国「民族解放斗争の新たな階級斗争の構造的転換を抱き込み新しい共存支配体制確立をめざしている。それはとりもなおさず、民族解放斗争の圧殺と闘う人民の分断、原料資源、輸出市場開拓の帝国主義の一貫した行動以外の何ものでもない。

### (C) 「帝国主義の支配秩序確立に向け、 顕在化した国内総再編」

このような日帝の沖繩「返還」を中軸とした侵略反革命軍事外交路線はいまや実体的に貫徹されんとしており、その下に国内における社会総再編は諸階層、諸階級を巻きこんで着々と進行しつつある。まず第一に、真に階級的労働運動の前進を排外主義的労働運動をもって石翼の再編を成しきり（基幹産業における総評、民間の帝国主義的労働運動への屈服を見よ）、中小未組織労働者への更なる差別と抑圧と分断化をはかっている。とりわけ今期春闘における闘いが、日帝の侵略反革命軍事遂行線の中で労働者人民への系統的攻撃「労働組合の支配機構の再編と総評、未組織労働者の闘いの解体でもって「労働戦線統一」の野望に対決すべき契機であることを見抜けず、生産性向上と合理化を賛美し独占資本と癒着する同盟、J.Cの帝国主義的労働運動の大攻勢の前に屈服している。第二に、帝国主義のこのような労働者人民に対する

階級分断の策動は斗うアジア人民とりわけ在日朝中人民への差別と抑圧の支配「入管体制でもって斗う人民の結合をはばもうとしている。入管法の立法化が日帝のアジア侵略にとって国内における民族排外主義イデオロギーの確立と在日朝中人民の闘いの圧殺、総じて、日「韓」台をむすぶ反共反革命軍事同盟の確立にはなくてはならないものであり、国会の再々度の上程からいまも継続審議を強行し立法化せんとしている。このように日帝は、自らアジア侵略反革命の国内政策をブルジョア法を駆使し法制化すべく、とりわけ治安政策の強化再編を法務省「法制審」と一体化した

刑法の全面改正でもって革命的な人民、労働者の武装解除、社会的株殺の弾圧を国内秩序維持の一環として意図している。帝国主義の治安政策は更に、国民総番号制、地域治安管理体制（自警団、民生委員）でもって市民社会末端まで支配網をはりめぐらせ、管理支配し、更に治安弾圧の最終的な完結として司法権力までを抱き込み、反動とファシオ化の暗黒の道を突き進んでいる。同時にこのような支配秩序確立の様々な野望と一体化し、支配イデオロギー排出の一大拠点「大学における再編の過程が露骨に進行していることを見なければならぬ。69年大学治安立法71年中教審最終答申と打ち続く政府「文部省の政策の本質はBrイデオロギーの再生産と労働力の新たな再生産過程の再編であり、教育Brは学内における学生管理の強化を国家権力と一体化してなし、一方、教育の名の下に、より高度で複雑な帝国主義的分業体制に見合っ

た労働力商品の生産工場として変質せしめ新たな産軍学複合体制として着々と貫徹されつつある。

かかる日帝の国内社会総再編の策動とそれに支えられたアジア侵略反革命軍事遂行は沖繩「返還」→沖繩への自衛隊派兵でもって凝縮し、そのことは情勢の新たな局面、米ソ体制の民族解放斗争の激化と国際反革命体制の再編と帝国主義の腐朽化の過程で更に激化する国際階級斗争の前進と日本における斗う労働者、学生、農民の熾烈な階級攻防環の視点でしか更に鮮明にならない。

### (3) 我々の任務（前期活動総括）

72年度の学術団傘下諸サークルの活動は、2月1日の同大学費決戦を頂点とする、昨年4月以降の五度にもわたる全学バリケードストライキを始め、大衆団交、有終館封鎖等々の戦術をもって展開された「学費値上げ→田辺町移転→大同志社構想」粉砕の爆発的な闘いが、2月1日の当局の権力を介した「封鎖解除→入試の強行→ロックアウト」といった弾圧体制によって、一時的ではあれ学生の決起が圧殺「分断」されている中において開始された。当局の広汎な学生大衆を無視した一方的な学費値上げの強権的推挙と、かかる当局の学内政策、即ち「中教審答申」の具体的な先取りであり、体現の過程である「田辺町移転→大同志社構想」に

抗する学生大衆の決起と、それに続く連続的な斗争、そういった当局との非妥協的な闘いの中において、当局は69年8月の「大学立法」の再現を楯に、機動隊の導入→ロックアウト、といったパターンをもって、69年の同大闘争の圧殺と同様、学生の意思「斗争とそのスト権を踏み潰していったのである。表面的には4月段階で「秩序派」（「民青」）を登場させ、問題の本質を彼岸に追いやってしまったのである。以上のような展開過程の中で、わが学術団本部は斗争の真只中の昨年12月末、改選リーダーズ・キャンブを開催し、72年度本部新常任委員会の強固な体制を克ち取り、学費闘争を最後の最後まで闘い抜く意志一致の下、4→12月とわたる8カ月の間、沖繩→三里塚の連続した斗争を担ってきた成果を踏まえ、唯一の闘争機関である活動者会議の組織強化を、諸サークルの戦闘的活動家の結集をもって獲得し、1・2月の決戦に突入していった。

我々の闘いは、かくて全国津々浦々の大学で燃え上った全共闘運動の、それらが日帝でルジョアジの反革命弾圧包囲体制によって圧殺、分断されていく過程で突きつけていった幾つかの限界性を突破すべく、確固たる目的意識性を携えながら展開せんとし、ていったことは勿論である。全共闘運動が、その運動終焉の過程で権力を介しての機動隊導入→ロックアウト→学生・サークル運動の日殺・分断といった弾圧の後、大学内の更なる帝国主義的分業再編を強化・再編していったことに対し、我々は「組織された



部隊」による学館前機動隊突破戦を、ロック・アウトに対して占拠を各々対置して闘い抜いた。そのことは何より「学費値上げ」の問題が、それ自身決してそれ一般として自己完結することは許されず、そのことは同時に、民青諸君の云う様な「額一般」の問題として捉えたところで、その持つ本質は明らかにすることは出来ず、斗争展開においても「白紙撤回か否か」の限りでは本当の意味で勝利することは出来ないであり、むしろ「学費値上げ」が赤字値上げ云々の衣裳を纏いつつも、明確に日本帝国主義のアジア侵略反革命政策の一つの大きな支として、その政策に見合った形で国内分業再編の一環を、教育のそれとして担うものであるが故に、権力・文部省・当局という権力体系との全面的対決は不可避のものとして捉え、闘い抜いていったのである。

かかる再編の具体的現実形態とは次の様なものとしてある。即ち、「学費値上げ」田辺町移転「大同志社構想」であり、それに伴う学部学科、二部、それに商業高校の廃止（来年4月に決定）である。それら同大ブルジョアジーの一連の学内政策は、決して個別同志社レヴェルのそれとしてではなく、その背後においては、関西財界、ひいては日本経済の再編の一環として明確に位置付けられ、規定され乍ら遂行されているのである。特に69年の全国各大学での学生大衆の決起を、国家権力のありとあらゆる手段をもって乗りきった教育官僚にとっては、最早大学は徹底した「産学共同路線」の遂行と、学生層に対する収奪、分断・支配の空間以

であることはいままでもない。以上の点を踏まえ、活動者会議の下に各サークルの戦闘的活動を結集し、全学闘争委員会の一翼を担いつつ闘い抜いた。そして2月1日の学費決戦で権力に多くの学友を奪われ、一定程度の組織・運動論的な混乱を余儀なくされている中で、4月オリエンテーションを迎えた。

オリテそのものに対し、本部として具体的な方針を出すことが出来ず、専らオリテ本部に依拠する形でしか対応することが出来なかつた点、結果としてそのことが4・5月の各サークルと本部の事務処理に支障をきたし、全体的な活動がかなり停滞してしまつたことを真摯に総括する必要があると考える。ただ2・3日の間の本部と各サークル間の連絡不足がかなり足を引っばる結果となつたことも事実である。先程述べた様に、現在の学生戦線・サークル戦線の後退の具体的状況に対して、本部は学術団運動の明確な方針の下に突破し克服していくそれを構築していかなければならないであろう。にも拘らずこの間、不十分な対応しかなし得なかつたこと、例えばそれは我々のサークル運動の新生生に対するプロパガンダ等々の不足であり、結果的には各サークルの研究会員の不十分な獲得状況・サークル運動の不活発を一面的に生み出したと思う。我々にかかる点を深く捉すと同時に、しかしながらそういつた状態の根源を辿るならば、現在の大学政策、日帝の基本的動向、更には現代帝国主義総体に求めなければならぬし、その認識を全く欠落した上で、単純に事務処理一般の問題に

外の何者でもなく、同時にそうすることなしには全国各大学間で展開されている矛盾に満ちた教育資本間の相克にうち克つことはできず、そのような教育資本間の争いそのものが全体において、日帝ブルジョアジーの「日」「韓」「台」軍事プロックを基調とし、5月15日の「沖繩返還」とそれに伴う自衛隊派兵をメルクマールとして具体的に開始されんとするアジア侵略反革命を支えていくのである。それはまさに日帝Br・同大Brの「死活」延命策動以外の何者をも表面していないのである。

我々本部は、以上の点に立脚しつつ、次の点を闘争課題と設定していった。同大Brの意図する政策は、一方に前述した如くの学内合理化と、他方特に学生の課外活動の圧殺分断支配を射程に入れて遂行されている点を、我々は押えつつ闘ったことを確認しなければならぬ。現在の我々の周囲に蔓延するサークル戦線、所謂「混迷と停滞」状況・具体的には運動論なきサークル運動から始め、サークル加入者の激減と市民主義的サークルの拾頭等に代表されると思うが――にカッコ付け、革命的サークル運動の圧殺・分断策が当局Brの手によって目論まれているし、それらは今後強化されていく方向にあると考える。就中、その具体的なものとして「別館ロックアウト」策動は、学費斗争の過程で日程のぼり現実的にはなされなかつたにも拘らず、そのことを雄弁に物語っているであろう。（註：中大学館の3年以上にもわたるロックアウト体制を見よ）又、田辺町移転はそこかっこの機会

況て解消してしまうならば、我々はその不毛性を指摘しておかなければならない。

ともあれ我国は学費決戦以降4・7月の間「学費決戦の切り拓いた地平を断固堅持し、4・7月斗争（沖繩、三里塚、入管等）を闘い抜け」のスローガンの下、サークル大衆に不断に運動を提起してきた。とりわけこの間の情勢を見るならば、最後の花道を飾ろうとする佐藤政府Brの戦後政治の大転換、5月15日の「沖繩返還」とそれに伴う「自衛隊派兵」こそは沖繩の日米帝侵略反革命前線基地化を軸とする、日帝Brの公然たるアジア再侵略の開始をつげるものであった。当日、首都東京においては戒厳令体制がしかれ、一万二千余名に及ぶ機動隊の配備化、現在の存在する沖繩の諸矛盾を陰蔽した形での記念式典を、マスコミを通じ国民に押しつけ、「沖繩返還」の名において、本土・沖繩の反革命的統合を議会内左派（社共）を巻き込みつつ遂行していったのである。

一方、現地沖繩では、復帰協路線のみじめな破産、即ち権力・議会内人民戦線派の反革命政策の中で、唯一沖繩人民の、とりわけ全運労を先頭とする労働者人民の基地撤去、日本軍再上陸阻止の闘いを、日帝のアジア侵略反革命軍事体系に鋭く括抗するそれとして現在もなお展開し続けている。

日帝の沖繩への自衛隊派兵は何よりも、国内の社会秩序のブルジョア体系の再編（四・五次防、出入国管理法、産業合理化と重

化学工業拠点作り、司法の反動及ぶ憲法の反動的再編、大学教育秩序の再編等々を背景とした資本制経済機構に規定された東南アジアへの市場拡大のための軍事確保の何者でもない。そして今年3月以降の北ベトナム正規軍と民族解放戦線の勝利的展開の前にみじめな敗北をさらした米帝は、アジアからの退敗を余儀なくされており、ニクソン訪中をもってその敗北を陰蔽せんとしたにも拘わらず、その策動が破綻するやいなや一層の北爆強化を行っているのである。だがそういった政策が誰の目にも敗北の証左以外の何者でもないことは勿論であろう。かかる中において、米帝の動向に規定されつつ日帝のこの間の動向がある。

我々は以上の様な沖繩闘争の煮つまり一高揚を前に、4・28・5・15にわたる連続的な闘争をわが活動者会議の旗の下、新入生の決起を克ら取るなから斗った。4/28・5/15（大阪剣崎公園）12（円山公園）15/15（東京：宮下1大阪：剣崎）とわたるデモを、又学内においては、5/12日の全学々生大会の圧倒的な勝利13・15日の全学ストライキを確立、沖繩闘争の革命的な高揚をつくりだした。4・5・6日とわたる沖繩闘争の高揚の中で、我々は6月リリダース・キャンプを開催し、4月以降の混乱状況を集約すべく、各サークルの新入生を含め圧倒的な結果の下、克ち取られた。詳細は当議案書を参照してほしいが、当合宿で確認された現在の各サークルの様々な傾向に対する批判的視点を、我々は更に鮮明にしていく必要がある。

サークルに対する情宣活動の不充分性、代表者会議の運営方針の問題点や、又各サークル指導者の指導の問題があげられよう。しかしそのことは何よりも各サークル内部で全体性の上立った不連続の運動の過程で獲得し、つくり出されねばならないことはいくまでもない。我々学術団総体が、如何なる方向性を持ったサークル運動をつくり出していくのか、又各サークルが各々の個別研究対象領域での研究過程を通じ如何なるものを獲得していくのか、といった各サークル運動論にまでその検討を要するものと考え、我々が現実的にサークル運動を担って行く時、以上の諸点はその原則点としてあり、そこが起点であることはいくまでもない。その点を踏まえてはじめて研究活動が保証されるのである。又、各研究会が不断に陥り易い幾つかの傾向については、この間我々は繰り返し批判して来た。（詳細は6月L・C議案書、方針の項参照）我々の研究会活動のめざすもの、それは即目的には既成の文化理論体系の享受から始いつつも、かかるレヴェルで研究内容をおしとどめるのは許されず、既成の枠を打ち破り、新たな創造・発展の領域へと突入させていくことが要求されねばならない。しかも現実の社会をありのままに、批判的に捉える限りにおいてである。

現在的に存在するサークル戦線の後退・混迷状況は決して表面的なものではなく、根深いものとして存在している。それは我々の周囲を見れば明らかであろう。だがそうであるが故に、我々は

6月のL・Cを、本部はサークル運動に関する不鮮明な点を有しつつも克ち取り、我々は八帝国主義の教育再編と反動の学園内での一切の政治的文化的ヘゲモニーを奪取すべく自治会選挙の日倒的参加をVのスローガンの下、自治会選挙へ突入していった。更には我々はこの間の情勢の重大さを踏まえ、社・共の「沖繩闘争終為証」をのりこえるべくこそその永続化一派兵阻止の闘いを提起し、これまでの闘争の成果を踏まえ、7月15日軍都北熊本への現地闘争へ決起していった。さみだれ式派兵をもって派兵をなさんとする日帝Brに対し、北熊本清水基地包囲闘争をもって応えたのである。

我々本部は学費闘争一決戦以降4・7月にわたる連続的な闘争を担って来、現在的には10・11月闘争を目前に控え、次の点を一つの総括視点として提出していきたい。

昨年からの間に至る一連の闘争過程で、各サークルから活動者会議に多くのサークル活動家が結集し、闘い抜いたのにもかかわらず、傘下諸サークルの多くが極めて消極的な形でしかその時代の政治課題に対応し得なかった点、特に学費闘争の最終的な段階において、各サークルが「学費値上げ」田辺町移転・大同志社構想」粉碎についての討論が極めて曖昧な形でしか煮つめることが出来なかった点を、サークル運動を創造的実体として作り出すといった実践的立場から充分総括していく必要がある。そのような全般的な傾向の一つの原因として、一面的ではあれ本部の各

この状況をどうのりこえていくのか、どう具体的な問題として応えていくのか、といった点が問われているのである。我々本部はこれまでに出された各サークルからの多くの問題点を真摯に受けとめ、それに対し明確な本部方針をもって応えていくつもりである。具体的には、近日中に発刊予定の「団報」と「論集」を軸にEVEをめざし、又10・11月闘争を圧倒的に担う中から展開していく決意である。

（9月21日、学術団代表者会議討議資料より）

## 第二部 学術団サークル討議資料 「サークル論考」

次に掲載する論文は、71年度春季リーダーズ・キャンプでの議案書の一部である。

現在のサークル戦線の後退状況に対し、かくての我々の運動の変遷過程を深く捉え返すなかから、現状況を突破していく意図とをもって書かれたものである。

学館斗争（65年）の勝利以降、「ア・プリオリ論文」で獲得せんとした「知的ヘゲモニー論」（67、68年）、そして全共闘運動が全国各大学で燃え上がりつつも、69年1月の東大、2月の日大と、次々に国家権力・当局の手による反革命弾圧の前に拠点を失い始めた頃、本部によって提出された「サークル解体論」へと、わが学術団運動の様々な変遷過程と、69年10・11月の新左翼総体の敗北以後の極めて深刻なサークル戦線の混迷、後退状況に対し、現在もなお、如何にのりこえていくのか、が問われているであろう。

学術団傘下諸サークルが、この論文で示されている幾つかの重要な点を、各サークルの特殊性に即して充分討論し、新たなサークル論の構築と、学術団運動の一層の飛躍を獲得していかなければならない。

尚、当論文と同時に、昨年12月の改選リーダーズ・キャンプ議案書、今年6月の春季リーダーズ・キャンプ議案書も併に参照されたい。

### はじめに

各サークルのキャップ、代表者、活動家諸君、現在のなサークルMの「混迷と停滞」は決して経験主義的に個別のサークル研究会を手直しするとかいった方法、即ち運営技術の問題では一切語れないものとしてあり、そしてまた「サークル」という全体性、本質性が各サークルの個別性、特殊性に圧倒され、学術研究団本部と各諸サークルの関係、サークルとサークルとの関係が枯渇し、一つの運動IIサークルMII学術団Mとしての極めて危機的な停迷状態が存在している。こうしたサークルMの停迷状態は、同志社大学に於いては65年、学館IベトナムI日韓斗争以降、とりわけ顕在化していったが、それに抗して学術団本部は「アプリオリ論文」として、68、69年の全共闘Mが膨大に政治過程に登場するに際し、「サークル解体論」を提出していったのである。しかし

「アプリオリ論文」「サークル解体論」が、外的契機（国際国内の階級危機）との反映として現象的に依拠し、正しい意識性にもかかわらず、スローガン倒れの傾向をまぬがれなかったことを総括しつつ、サークルの内在的形成過程を対象する過程で、サークルの内的矛盾の止揚の問題を過去の正しい継承性のもとに新たなサークル論の準備を果してゆこう。

### 1 章

工作者谷川雁はマルクスの『資本主義的生産に先行する諸形態の中で分析されているギリシア・ローマ型、ゲルマン型、アジア型、という三つの共同体類型が未来の共同体に於ける組織と機能を「戦闘」／＼会議／＼生産／＼の三種類として各々の共同体の特色を有していること、そして歴史は社会の共同体的契機を階級的契機が圧倒していく過程の中からその極限状況に達したところで逆転して、共同体的契機の止揚、克服という過程をたどり、未来に生き残ることが予想される「前衛党」／＼労働組合／＼青年／＼婦人の組織／＼その他大衆組織はことごとくある面では一種のサークルであり、共同体的には、政党、労働組合などは一種の「戦士共同体」／＼としてあり、青年、婦人の組織などは「会議共同体」／＼文化サークル等は「生産共同体」／＼であるといえ、階級矛盾が緩和し社会主義革命の前進されるにつれ、これ等各種の共同体の特殊性の枠がとりはらわれ一箇の「コミュニティ」／＼として合流してゆくもの

であると指摘している。それは共同体における人間関係が未来社会のそれを内包していることの重要性和、共同体的契機IIサークル形成契機が人間の真の、連帯感II結合、交通形態の希求であることを一面において物語っているのである。マルクスは、「共同体のうちのみ各個人にとって、自己の素質を全面的に発達させる手段が存在する。またそれ故共同体のうちでこそ人格的自由も可能となる。……真の共同社会性においては諸個人は彼の連帯のうちでまた連帯をとおして同時に彼等の自由を獲得する」と述べ、サークルに関してグラムシは、「自分たちの生活を「市民」の社会でなく、「同志」の社会として人間どうしが相互に狼であるような個人の社会ではなく、共産主義的な結合関係の社会として秩序づけていくもの」として、マルクスのいう真の共同体の「萌芽」、「原型」としての意義をもつものであると展開している。僕たちはこうした問題提起を深くほり下げる中から、迫り来る階級危機にたえうる新たなサークル論の構築をはかってゆかねばならない。

### 2 章

まず確認されなければならないのは、僕たちのサークル自体が、現代社会の構成の一部分を形成しており、現代社会の情況はサークル構成員に深く浸透、反映しており、そして、その情況の真只中におかれていることなのである。それ故に僕たちは現代社会の

情況の中で、サークルがクラブや同好会ではなく、サークルとしての存在価値、あるいは現代社会の中で如何なる役割を担えるのかは、とりもなおさず現代社会の情勢の分析を通じて現在の一般的、支配的なサークル運動を対象化する作業を行なうことによつて果されるものである。またそれを果すことは、とりわけサークル構成員にとって重要な課題なのである。すなわち僕たちのサークル論は、現代社会の基本的な特徴⇨矛盾の内容の検討をもつて出発するのである。現代社会の基本的特徴⇨矛盾は原理的にはマルクスの資本論に要約される内容をもつて、また現在のにはレーニンの帝国主義論、そして一九一七年、ロシア革命後の過渡期世界論Vの問題としてあるのである。しかしここでは資本論、帝国主義論、過渡期世界論を詳しく述べることは目的でないので、サークル論構築の上での必要な程度の記述にしておくことにする。頭のとっぺんから爪先まで血と汚物をたらしながら生れてきた市民社会⇨資本主義社会は、その過程⇨本源的蓄積過程に於いて暴力的に人間の商品化と収奪による生産手段の集中を秩序づけ、私有財産制の神聖なヴェールをはがされぬ限り、支配者階級ブルジョアジーは、自らの特殊利害を被支配者階級との共同利害として国家を媒介に支配⇨統合を可能ならしめているのである。この基本的な物的な根拠は、本源的蓄積過程、とりわけ人間の商品化を前提として成立する商品の価値法則を市民社会の背骨とすることによつてなされるものである。人間の商品化は支配者階級ブルジョアジーそのものをも包摂するのはいうまでもなく、市民社会にあっては富⇨価値は商品の集積としてあり、商品を能動的⇨実質的に生産する人間は物件的な商品の価値体系の下に支配⇨隷属せしめられるのである。⇨それは労働の疎外形態を基本とする人間疎外の再生産構造として、資本主義社会があり、そのうえに極めて完成された機能と形態を有した上部構造が存在するのである。V万人⇨市民に対して平等性と自由性を完備しているこの上部構造⇨交通形態は、根本的には賃労働と資本という搾取関係を隠ぺいしてなされるものであり、商品の価値法則がその物質的背景を与えているのである。⇨すなわち、現代社会⇨市民社会は、一切の物象化物件化を基に人間疎外の強制的構造化をその本質としているのである。Vその疎外は第一に労働主体の生産物からの疎外であり、第二に主体の対象化過程そのものの疎外であり、また第三に類的な疎外であり、総じて自己疎外⇨人間疎外と言われるものである。具体的には第一の⇨疎外された労働⇨といわれるもので自らの対象化物⇨生産物が疎遠な存在として、対象化過程⇨生産過程から独立した力として労働主体に對立・對抗することであり、第二の⇨対象過程そのものが疎外されることによつて、労働と引き換え使用価値の展開は労働主体にとって外的となり、それは強制的労働として現出する。労働・労働過程は労働主体の内発的欲求を満たすことなく労働、労働過程以外のところでの欲求を満たす手段にすぎなく歪曲、疎外されてくるのである。第三の⇨は、労働

主体自体が自らの合目的な生産活動から、また自己の生活行為自体からも疎外することによつて類・類的生活から疎外されるのである。それは人間にとつて類的生活をその個人的生活の手段に転化させる。それは類的生活と個人的生活、その両者を疎外してしまふのである。

⇨こうした資本主義社会⇨市民社会の疎外の強制は、サークルの形成契機の本源的な内発力を成しているものなのである。Vすなわち、かかる人間総体に対する全面的な疎外は、個への分解と分断、競争と排他性、隷属と抑圧を必然化、かつまた構造化している情況、これに対して即目的にせよ反発・反抗として無意識的にそれを回避、あるいは脱出しようとしてさまざま諸個人をもつて共同体⇨サークルはその内在的な発生的契機を持つのである。それ故に本源的には反体制的、反市民主義的な側面を有しているのである。しかしレーニンが「何をなすべきか」「自然発生的にもっとも多くおしつけられてくるのは、最も普及しているブルジョアイデオロギーである」と述べているようにこのような共同体の形成契機は自然発生性、即自性に根ざしている側面から体制内的、ブルジョア的なものを有さざるを得ないことを自覚しておく必要があるだろう。それは反体制的、反市民主義的、つまり前述した人間の分断、疎外抑圧等への補償、反発としてサークルの内在的な形成⇨発生契機とされるところからそれを即自的な形態で実現、満ちようとする自然発生性に全面的に依拠しようとする傾向

向はその本質的な解決⇨止揚の道を阻むばかりで、ますますその疎外形態の再生産の悪矛盾的展開の道に落いらざるを得ない。そして結果的には一切を解決しえず、疎外感それ自体における二律背反を拡大せずにはおかないのである。つまりその即自的な欲求、本質的には⇨人間疎外からの解放⇨それ自体にも疎外されてくるものとして結果するのである。またそれは一方に、そうした本源的成長性に拜跪、埋没するサークルは本質的には資本の論理と商品の論理にアンチとしてあるにもかかわらず、即自存在として定立しているが故に、それは体制内の補完物、付属物、不満解消の場と化し、その存在そのものはブルジョアジーの政治家に横領され、操作されるものとしてあることを意味するのである。それでは次に何が問題になるのか。

⇨共同体⇨サークル形成は歴史的なものであり、そうした内発的的形成契機を主体的要因とするならば一方に直接的な外的形成契機はその歴史的状况の変遷過程を背景としており、サークルの指導⇨目的意識性の問題があるのである。Vサークルの指導、目的意識性の問題は戦後のサークル運動の変質過程を見る中で述べるとにし、ここでは⇨第一に谷川雁等が教えたように共同体⇨サークルは新しい質の人間の結合関係⇨本源的契機の結実を内包していること、⇨第二にそういう本源的な内発性、人間性自体が意識化、対象化され、否定の解決といった弁証法が不断に自覚されていること、⇨第三に本源的契機の結実がサークルに限

れば、その自然成長性、自然発生性との全面的、永続的な対決とその緊張関係を媒介せずして内的には達成されえないことである。そしてかかる自然発生性、自然成長性との不断の対決、谷川雁流に言えば共同体における階級的契機の意識化を放棄、ないしはこれに一切無自覚なサークルを本質的に市民主義的サークルと僕たちは規定するのである。

### 3 章

前章で、レーニンの『何をなすべきか』の中で「自然発生性は目的意識性の萌芽である」という論述をサークルの内在的形成原理を見てきたが、次にそうしたサークルの発生契機への直接的な外契機、サークルの指導原理、目的意識性の問題を戦後のサークル運動の変質過程を概観する中で検討することにしよう。戦後のサークル運動は一方の極に戦前のナルプの流れをくむいわゆる人赤色サークル主義Vを持ち、支配的には市民主義的原理をもって出発したのである。

戦前、戦中、軍国主義に追随した教授の戦争責任の追求、あるいは追放運動に始まり、「学園の民主化」と「大学の自治」を克ち取るなかから、全学連結成（一九四八年）に至る思想情況の影響、ないしはその一翼を担うものであった。そしてこの「戦犯教授の追放」に始まる学園民主化、生活改善の闘いは50年代において、大学は「学園の府、平和と民主主義の砦」といった理念とし

闘争の敗北はその闘争のよって立つ基盤、戦後の闘いの生産総体に対して、危機と破綻を暗示させるものであった。そして、六十年安保闘争が急進的市民主義的運動の域を脱することができず、闘争を牽引、領導したいわゆる安保ブンドは市民主義運動の最左派として位置し、それ以上でも以下でもなく、敗北の総括は根底的であり後の分解と混迷を必然化するに十分なものであったのである。それは戦後十五年間の革新的指導原理、『平和と民主主義』の理念が六十年安保闘争敗北後情況の進展とともにその政治的・文化的生命を担い切れぬものであることが明白化してくることに証明されていったのである。そのことは戦後の混乱期の「生活の防衛」から「生活の改善」「学園民主化」、「大学の自治」「学問の自由」といった日常性の中から私的な個人主義的価値観それ自体が六十年安保闘争後、革新陣営からブルジョア支配者階級の政治屋にそのヘゲモニーを篡奪され、ブルジョアジーは、それを自らのヘゲモニーの下に集約していくことを意味したのである。すなわち、六十年安保闘争後の階級闘争の退潮期とあいまって、岸内閣の退陣に続く池田内閣の「所得倍増」「高度成長経済政策」はそうした戦後の大衆の間に浸透、定着した個人主義的価値観の否定的側面である利己主義、排他主義を助長し、「所得倍増」は「家庭の充実」「家庭電化製品の整備」へと、マイホーム主義に集約されてゆき、「高度経済成長政策」は「所得倍増」のスローガンをひきつけて、「国家の繁栄」海外への経済進出と

て定着し、結実してゆくものであった。こうした過程における思想性、意識性を外的な契機として各大学にサークル運動が展開され始めたのである。それは戦前の戦争遂行体制に戦争がもたらした人間性の圧殺、家庭の破壊、一切の束縛は敗戦後の大転換にあって、混乱をきたし、こうした社会の混乱状況を秩序づけ、良識ある市民、学ある人格を養成することが当時の中間的インテリゲンチア層の社会的責務とされたのである。そしてサークル活動家、指導者、サークルの目的意識性もそうした人格形成、一般的に「社会の進歩に寄与する人間を養う」ことにあったのであり、それは本質的に資本主義社会に市民社会の一般的、支配的価値観である個人主義原理に根ざすものであった。そしてそれは、確かに戦前の全体主義の価値観からすれば大きな進歩であり、評価しなければならぬが、その価値観はブルジョア社会を産み落したものであり、そのブルジョア性、反動性は意識化され、忘れてはならないものとしてあるのであった。サークルの市民主義的指導原理は五十年代の「平和と民主主義」の闘いに相互関連を有し、呼応するものであり、その戦列に積極的に参加するものであった。すなわち、それは市民主義的権利と理念の獲得と拡大の闘いとしてあり、六十年、安保闘争にその頂点を成すものであったのである。巨大な大衆闘争を形成した六十年安保闘争はそうした戦後の個人主義に立脚した「平和と民主主義」の闘いの定着とその精華を示したのであり、その総決算であった。またそれと同時に安保

して操作されてゆくのである。そして安保闘争を闘った民衆は霧散してしまつたのである。その意味で安保闘争後をブルジョアジーは勝利的に乗り切つたのである。また当然のことながら、こうしたブルジョアジーのイデオロギー攻勢はサークル運動に混乱と危機的情況を強いることになるのである。それは単にサークルが崩壊するとか解決するとかいった運営技術的な混乱や危機ではなく極めて本質的なものであった。すなわち、戦後のサークル運動の指導原理、それ自体がブルジョアジーに横領され、圧倒的なイデオロギー攻勢の前に、その否定的側面・利己的、排他的個人主義の開花として現出するのである。それは一方に同好会運動の興隆として、そのサークル運動への影響、波及であり、大衆の自然発生性への拜跪、埋没であった。同好会運動の「好きな時間に好きな事を」「サークルに政治を持ち込むな」「楽しいサークルを」といった発想はサークルの目的意識性を欠如させ即自的な自己満足的サークル運動への後退であった。そしてもう一方にブルジョアジーの目的意識性生産学協同路線の要請とあいまって、市民社会の競争に積極的に参加しようとする利己的な個としての目的意識性を全面に押し出した、安上りに労働力商品の再生産の場としてサークル運動が利用される傾向をうみだしてゆくのである。こうしたブルジョア文化運動への屈服は真摯なサークル活動家にとって焦燥感と危機感を倍化するものであった。以上、戦後から六十五年頃までのサークルの変

質過程を見て来たが次に、この章の冒頭でふれた赤色サークル主義に関して若干述べることにする。

赤色サークル主義は戦後ただちに復活したのであるが、赤色サークル主義とは一九三〇年、モスクワで開催されたプロフィンテルン第五回大会の諸テーゼの提起に当時の日本でプロレタリア文化運動の指導的立場にあった蔵原惟人の芸術団体の再組織化、大衆組織の形成における理論的基礎の確立を背景として展開されたものである。またサークルという言葉が一般化したのもここに端を発している。この文化運動論の組織論的な基本はプロレタリアートの基本的組織、前衛党、労働組合の政治的社会的任務を大衆の中に拡大し、その指導理念の下に大衆を動員、養成するための補助機関としてサークル運動はもとより文化運動総体がその機能を有さねばならないとされた。それは文化運動の目的を政治的組織の目的に解消し、サークル運動の役割を大きな視点から評価することができず、目先の政治的利害関係の下にサークル運動を矮小化し、サークル運動の引きまわしを結果することにならかねないのである。とりわけ戦前のこうした文化運動の目的と政治的運動の目的を無媒介的に直接的に同一化することによって文化組織と政治的組織を混同するといった誤まった傾向は戦後にも尾を引くのである。しかしそれはそのサークル指導者が戦後の社会的情况、条件の誤った認識、合理化の下に、現象的には異った形態をとってあらわれるのである。

治的に目覚める場としてサークル存在の位置が指定されているにせよ、その目的意識性自体の觀念性は、自然発生性、自然成長性によって圧倒されてゆき、それに埋没する俗流大衆追隨路線へと転化せざるをえないのであり、そうしたものとして日本共産党の総路線はあったのである。敗戦後、民主勢力として発展、増大していったサークル運動は、四九年から五〇年にかけて停滯期を招ねき、一方において、赤色サークル主義を純化したサークルのセクト化を、他方において前述したように赤色サークル主義の流れをくみながら変型した形態で自然発生性、自然成長性に圧倒されたサークルができてはつづれるという輪合集散をくり返すのである。五〇年秋のレッドパージはサークル運動に破壊的打撃を与え、続く、日本共産党の急激な左旋回としてのいわゆる極左冒険主義、火焔ビン闘争の時期には、赤色サークル主義の悪しき側面が全面に打ち出され、サークルの条件など無視され政治的任務が強制され、少なからぬ多くの有能なサークルがつぶれていったのである。しかし、こうしたサークルの潰滅的情况の中から文化闘争の重要性とその独自性を認識し、サークル、グループといった小集団の活動が重要視される傾向、またねばり強いサークル運動も有能な活動家によって展開されていった。また一方に指導理念も、目的意識も持たない人々が即自的な文化的欲求を満たすため、我も我もといたるところでサークルをつくりはじめた。それはサークル運動の危機を予見させるものであった。

一九四五年、日本帝国主義の敗北は、アメリカ帝国主義をして日本帝国主義の基盤を一定程度打ち砕かれる。それは一般的に「民主化政策」と呼ばれているもので治安維持法、国家保安法の廃止、政治犯の釈放、特高警察の廃止、天皇制批判の自由、労働者の団結権、教育の自由主義化、経済の民主化等であった。こうしたいわば上からの民主化と同時に大衆の中からの民主化の組織化は、資本主義国日本の独占ブルジョアを危機的情況に追い付めたのである。しかし、こうした戦後の日本資本主義の決定的危機は、アメリカ帝国主義の日本軍事占領、軍事的制圧をたのみに日本ブルジョア支配者階級の延命が保障されている関係と表裏をなすものとしてあったのである。そして日本ブルジョア支配者階級は新たな再建の時期を狙い、専ら生産のサポーターとヤミそしてインフレに自らの活路を見出しながら、新たな攻撃の時期をうかがっていたのである。こうした日本資本主義体制の弱体化と危機的局面を、「民主的ヴェール」と「獄中からの解放感」に酔いしれた、前衛党たるべき共産党指導部は、三二年テーゼの亡霊にとりつかれ、一切を正しく認識できないままに誤謬に満ちた大衆指導を行ない戦後革命を流産させてしまうのである。こうした日本共産党の二段階革命論、民主化路線、平和革命議会主義路線を背景に、経済主義者のな水ぶくれ主義の自然成長性、自然発生性、万歳のサークル論を流布し、サークル論はサークル運営技術論で事が足りることとなる。それは確かに民主勢力として政

こうして六〇年代は総じてサークル運動に於ける過去の一切が問われ、混沌と停滯、危機の時代を迎え、新たな模索の開始と総括の季節に入るのである。

#### 4 章

こうしたサークル運動の混沌と停滯の危機的情況の中から新たな模索は、我が同志社大学に於いては、文化戦線指導部である学術団本部、文連本部が学館闘争（一九六五年）、ベトナム、日韓闘争（一九六五年）への関わりの中で開始されたのである。同志社大学の学館闘争はその一定程度の勝利にもかかわらず、闘争の指導原理、つまり市民主義、個人主義に立脚していたが故に、アメリカ帝国主義の北ベトナムの爆撃の開始によるベトナム戦争の激化、朝鮮戦争の特需景気をステップに大きく成長した日本帝国主義の海外侵略の第一歩である日韓条約、これ等さし迫る階級の危機との内的関連を明らかにし得ず、政治主義的に学館・ベトナム・日韓闘争は関係づけ結合されて闘われたのである。それはその後の闘争の後退と混沌を余義なくさせたのである。こうした渦中から脱すべく学術団本部は機関紙である「アプリア」紙上で「知的ヘゲモニー論」を提出したのである。それは旧来のサークル指導原理の限界性と反動性を国家権力と市民社会の一体性の論理の中に探知し、旧来のサークル指導原理と明確に訣別する必要を説いたのである。「知的ヘゲモニーを形成せよ」「知

的全体性を獲得せよ。これが新たなインテリゲンチヤ、文化戦線指導部の指導原理となるべきものであると、こうして知的ヘゲモニー体系を創出し、権力を市民社会内部から包囲すれば、二重権力状態が生まれ階級危機が生じるかのごとく夢想することはリアルな権力奪取の問題を遠方に追いやり、楽観主義に落ちていく浮き目にあうものであったのである。そして厳密に言えば知的ヘゲモニーの形成なるものは成立しないものであり、またそれを実現してゆく媒介の論理、対象化の契機を有することができず、それ自体の観念のみが自己目的化されるものとしてしかないのである。意識的、観念的なものは同時に物的な、すなわち動くものとして指定されなければならないのである。アプリアリ論文は文化運動における第三期論の位置を成したといえるものであった。

そして六八年一六九年、全共闘運動が諸サークルを巻き込むかたちで膨大に登場する過程で学術団本部、文連本部は即自的にアプリアリ論文とは無関係に、また一面に矛盾を有しながらもサークル解体論Vを打ち出してゆくのである。それは全共闘運動を背景にサークルをとりまく大学内の階級分解の反映とサークル内部の目的意識的に階級形成を担わんとする突出部分の出現にあって即自的存在として定立していた自己満足的な共同体を対自化させた共同体に高め、発展させなければ、その共同体は体制内補完物化、あるいはファシズムに吸引、ゆだねることを意味するとして共同体を向自存在化しようとしてサークルの分解が顕在化して

いたのである。この結果、典型的にはサークルの解体派と防衛派としてこの二極分解としてあり、サークル運動の本質的に重要なエレメントの顕在化があったのであり、旧来のサークル運動の止揚の物的な基盤を醸成するものであったのである。それは全共闘運動そのものに、この共同体論的にサークル解体派のサークル運動論がカタルシスされた原基としての第一期全共闘運動II反大衆運動と同質のモメントを認知できることは注見されることなのである。また全共闘運動が文化一社会闘争としての過程を経過していることにも帰因するであろうし、自己否定の論理はそれを端的に明示しているだろう。

自己否定の論理は帝大解体の論理として、日本帝国主義打倒と全人民武装といった六七年、三派全学連の階級闘争に於ける歴史的な正統性と巨大な前進を媒介として政治過程に飛躍しない限り、すなわち現実的には政治的な永続闘争として止揚一知的全体性の止揚の対象化一する方向を持ったものとして自らを鍛え上げてゆくものに転化してゆくのである。それは自己内部の「自己否定的」価値体系の実現化として政治のレベルに上昇することを強いられたのである。まさにこうした情況の反映としてサークル内々も、自己完結的サークル運動に埋没してサークル構成員を領導してゆこうとするサークル防衛派と文化一政治の相克、飛躍の要請の中でサークル運動を推進発展してゆこうとするサークル解体派へと、外的情況の進展はますます二極分解を促進し、新たな共同体IIサ

ークルの形成の模索を、理論的にも物質的にも準備していったのである。

そしてサークル解体派は外的な発展II解体再編の契機を有しながらも、論理的整合性をもって解体の必然性の論理II創造的発展IIを断行すれば、それは現実的には解体II創造が解散II崩壊でしかない事態に陥ってゆくか、またそれを予知してかサークル解体派は譲歩して、サークル防衛派II市民主義的サークル運動に屈服していったのである。しかしサークルの内部矛盾、すなわち解体の必然性は外的情況の進展にともない激成化するばかりで、サークルがその文化的一政治生命を放棄しない限りにおいて、ますます危機に直面してくるのである。

サークルの政治性はサークル構成員の政治のレベルと密着しているのは当然のことであるが、サークル自体が政治性を獲得してゆくものとしてあらねばならないのである。この視点の欠落こそ決定的なものである。サークルをとり巻く外的情況からサークル解体への波及力を契機とする、すなわち旧共同体から新共同体への転期とするものであるが、それでもってのみで旧共同体を再編・組織し、新たな共同体形成へと移行させるのは強引であり、共同体の矛盾を外化させるのみで結果的には共同体を崩壊に導くものである。であるが故にそのサークル内部矛盾の止揚、それはサークル自体の政治性の獲得過程とその対象化過程を組織論的に完成することをもって達成されるものであり、この事を欠落

させてはより高次のサークル運動は展開できないのである。そしてまたより高次のサークル運動を展開しない限り、そのサークルは情況に敗北し、市民社会の汚物と臭気をまき散らし、不朽化、寄生化してしまうことはまぬがれ不得ないのである。その意味で新たな飛躍は必然的なものであり、飛躍しなければならぬのである。

#### おわりに

七〇年代の情況に耐え、能動的に未来社会の一部を形成しうるサークル運動論を構築することは極めて困難な作業である。しかしそれをやりきることなしには、一步も前進しないのみならず更に立てなければならぬ。少なくともイメージしなければならぬであろう。しかし、この課題は僕を含めた諸サークル活動家もといより文化運動の指導的立場にある多くの人々の焦眉の急となつていたのであり、僕がこの課題を解決できる筈はなく、ただその「導きの糸」でもと、1-3章まで書いてきたのである。また3章において新たなサークル運動論が多少なりともイメージできたのではないかと思っている。

サークルは「前衛」でもなければ「後衛」でもない。かと言ってサークル自体は前衛と大衆の中間をなす工作者集団でもないが、しかしサークル指導者、活動家は工作者であらねばならないであ

ろう。サークルは組織である。この事実は第一に、ルカーチが述べているように、組織は理論(目的意識性)と運動(組織的な実践)を媒介するものであり、理論//対象的認識活動//を持たない組織も、運動//組織的実践活動//のない組織もナンセンスであり組織は不断に組織構成員の中に理論と運動を伝達、媒介する//工作者Vが必要とされることを意味しているのである。第二に、サークルが組織であるという簡単なこの命題は組織の本質が権力であること、すなわちたとえAとBが組織化することによってAの力とBの力を個別にプラスした力以上をプラスαとして発揮でき得ること、またその組織化が高度化ないしは緻密化すればするほどプラスαは増大してゆくものとしてあることを意味しているのである。こうした二つの組織論的な意味内容は3章で述べられているサークル解体派のグループに先駆的に体现され、新たなサークルはA権力Vとして、また//工作者集団Vを常に内包する組織としてあらねばならないだろう。すなわちこうした特質を新たなサークル論は極めて重要視しなければならないだろう。グラムシは述べているようにサークルの組織論は市民主義的原理に基づくのではなく、//同志的なものVを原理とするということはこのことを意味している。新たなサークル運動論は組織論を基軸に展開されるであろう。

#### 参考文献

谷川 雁、「影の越境をめぐって」

マルクス、「経済学、哲学草稿」  
レーニン、「何をなすべきか」  
マルクス、「資本論、一巻」  
グラムシ、「選集1」  
三浦つとむ、「大衆組織の理論」  
ルカーチ、「組織論」

#### おわりに——— 出発のために

71年度、春季L・Cに向け、そして今年度の学術団サークルMの方針として、学術団政治局よりのこの//論考Vは各サークル活動家、キヤップ諸氏に、相互媒介的討論を通して物質化するものとしたい。

我々は新たなサークルMに参加するであろう新天生に対して、その俗物性に拜跪しサークルの//目的意識性Vを売りわたしてはならないし、また市民主義的サークル自体が、腐敗性、寄生性を開花している現在の低迷状況を、根抵的な切開とそれ自体の対象化の作業なしに、あるいは無自覚に、プラグマチストに転落している少なからぬ多くのサークル活動家との対決//斗争、あるいは、各サークルにはびこる同好主義的傾向、サロン化、個別研究の圧倒(//部分人間の産出)等のブルジョアの自然発生性、自然成長性との対決//斗争、これ等困難な作業を、その緊張関係の中で展開するサークルの//工作者Vを創出させねばならないのである。しかしこの古びた方針//工作者を創出せよ//

## 第三部「プロレタリア独裁とコミニオン原則」

——— ロシア赤軍論争を中心にして ———

山 崎 カヲル

今日は「プロレタリア独裁とコミニオン原則」というタイトルでしゃべろうと思います。これはだいたい羊頭狗肉の様を呈してきて、やっていると一つはやはりロシアにおける赤軍前史と事実上プロレタリア独裁とコミニオン原則、あるいはプロレタリア独裁と過渡期国家、そしてそのプロレタリア独裁をになう機関あるいは組織、そういうものが全般に問題としてあらわれてくる。それはロシアの赤軍が建設されたあとです。つまり一九一八年、一月三月に赤軍の建設というものはじめて行なわれた前母体はあったわけですが、そのあと軍事専門家の問題、あるいは将校の選挙制の問題、そうした形で軍事反対派とトロッキーとの論争があり、その過程で、労働者反対派と中央、それとの論争の問題があり、また民主中央集権派とそれから絶対的中央集権派とのクニコフあるいはレーニン、スターリンといった連中との論争ということと重なって大体戦時共産主義という時代を形成していくわけです。それから今回ここでしゃべりたいのはそのあととの問題で

はなくて、つまり赤軍論争の問題というよりはむしろその赤軍論争に至るまでの一体ロシア革命というのは一体どういう武装した組織主体によってになわれそれほどのような闘争形態をみずから手に集約してやったかという問題を主たる問題として集約したい。したがってコミニオン原則あるいはソビエト過渡期の問題というのはあとの方でただ触れるだけにとどめるといふことで、こういう意味で羊頭狗肉の感があると思います。われわれがなぜロシア革命の過程における軍事の問題つまり、武装闘争の問題をとり上げないかという、大まかにいって二つの理由があるわけです。一つはロシア革命が武装闘争として戦われ最終的には十月革命という形で最終的に処理していくという形で、そこにおける軍事の問題というのは等閑視できないはずなんです、日本でのロシア史特にロシア革命研究というのはほとんどといっていいほどこの問題をネグレクトしている。なぜ等閑視されるかという理由はいろいろあって一つにはロシア史国民史研究がやはり大学



におけるブチブルジョアジーによって担われているという、内在的な制限があります。もう一つはやはり未だにわれわれの間にスターリニズムというのかなり大きな比重をもって無視できない形で支配しているということが問題になるわけです。第二の理由としては現在われわれがかかえている問題の一つの解決を見出すことができればいい。ロシア革命というものは御承知のように一九一七年、二月革命十月革命の過程ですが、事実上は一九〇五年つまり日露戦争がロシア軍の敗北に終わりペトログラードを中心蜂起が起きる。われわれはその一九〇五年の革命から内乱の終焉一九二〇年までその十五年間というかなり大きな過程の中でロシア革命というものを評価しなければならぬ。そこにはその当然のことながら民兵があり正規軍ありつまり赤軍ですねーそれだけではなく案外忘れられているバルチザン、ゲリラもあった。そうした軍事組織形態、あるいは軍事闘争形態そういうものすべてがロシア革命の過程には存在していたわけです。またそれだけではなく大衆機関とその公規機関との関係、また党と軍の問題、軍事と政治の関係、そういうまさに現代的な形でわれわれが問われている、そういう課題の一切が一応理論的実践的に提起され、一応の形で解決されている、というふうにわれわれは見る事ができる。もちろんそうした課題というのは、大体実践的にしか解答が与えられないわけですが、われわれは現実の実践と同様に過去の実践からも学ぶという姿勢というのを忘れてはならないとい

ている。つまり毛沢東軍事論文選とかあるいは、その現在出ている『星火燎原』というようなものだけで中国革命というものを軍事的に総括できないし、そういうことを考えなきゃならない。そうした中国革命にしろあるいはキューバ革命、ロシア革命にしろそのもの様々な権力闘争の政治的な背後その他から様々な形で、もちろん軍事問題だけではなくて政治的な問題についてもそうなんです。その大量の事実というのが闇の中に全部おしこめられてしまう。われわれはそういうものを掘り出して豊かな経験をみなければいけない。たとえば広東コンミュニオンなら広東コンミュニオンでーこれはまあ、一九二九年にコミンテルンがちょうど極左路線をとっている段階ですが——ノイベルグというペンネームで、当時の赤軍の最高指導者だったコハチェルスキーあの当時の農民インターナショナルというのがありまして、その事実上の統治者だったホーチン、そのへんが集まって『武装蜂起』という本を書いたんです。これは武装蜂起の教科書みたいなものです。これは広東ではどういふような武装蜂起が行なわれたか何とかという連隊はどこにいてどこそこでは剣銃何丁持った、〇〇部隊がいてこういうような動きをしているそれに対してこうこうこういふような形で攻撃が行なわれた、そういう実にくわしいレポートなんか出ているところがそういうものが現在のわれわれが見てる正規の公式の中には全然出てこないわけです。そういう意味でわれわれはやはり過去における非常に豊かだった武装闘争そういう

いたわけですね。大体革命史というものは、特に成功した革命というものは一つの公式の公認の歴史というものをつくりました。それはそれなりに軍事的な観点というものを与えてくれるわけですが、ここそうした公認なる歴史の背景には、それに数倍するかくされた軍事的背景があるわけです。それはたとえば中国においては中国における軍事問題といいますが、われわれは毛沢東軍事論文選という、たいへん安くていい本を持っているわけですね。でも、しかしながらあそこにおいては、大体において、ソビエトまたそれ以降の調整の過程、それから国内戦争の過程という形でもって論文がまとめられているわけですが、中国革命というものは、都市部でも経験しているわけです。まあ広東コンミュニオンがそうですし、上海における蜂起がそうです。そうしたものがロシア革命、中国革命の軍事史の中では非常に等閑視されている。あるいは実に小さな形でしか評価されていない。たとえば最近中国革命に関する限り『星火燎原』という本の二冊目の翻訳が出ておきます。それは多少広東コンミュニオン、あるいは上海蜂起というもののがわれわれの前に提示されているわけですが、あれは決して軍事的なものではなくてむしろたとえば広東コンミュニオンでは、当時の偉大な赤軍の將軍であったガリューとならんで最も有名だったヨーテが書いたレポートがあるんです。それは実に軍事的な観点からかかれた立派なものですが、そういうものは公認の党史の中では言及さえされていない。歴史の背景の中に完全に葬られ

ものの経験というものをわれわれも掘り出して学ぶ必要がある。われわれはこの観点からいってみれば、かっこつきの蜂起というものを経験しているわけです。そういうかっこつきの蜂起の中にでもたいへん多様な経験や学ばず教訓というものがあつて、現在世界各国では武装闘争というものが行なわれていて、このうちここから見て重要だと思われるのは一つは都市ゲリラと民兵というものを完全に結合させた闘争をやっている北アイルランドの闘争です。もう一つは都市ゲリラとして、おそらく世界最高の組織率をもって世界最高の運動形態と運動内容を持っているウルグアイの闘争、こうした世界各国の武装闘争から学ぶという姿勢も必要ですが、いわゆる過去の過去におけるその軍事革命、軍事革命史の研究というものがわれわれはやってその中から多くも学ばべきである。そういう意味でここでロシア革命における軍事問題というものを特にとり上げてみたいんです。

これから問題に入るわけですがロシアにおいてボルシェビキたちが軍事問題を真剣にとり上げるのは一九〇五年の革命です。もちろんその政治的な蜂起というものが武装の問題を内包しているというのは原理的には非常にはっきりと確認されている。しかしながらそれがきわめて焦眉の課題としてなったのは軍事問題が問題として意識され軍事闘争が闘争として意識されてくる時期、一九〇五年というのは、いってみれば一九一七年の革命の原型をなしているわけです。というのは蜂起のありかたに関する限りは

一九一七年は一九〇五年をより目的意思的に反覆しているといつても間違いはないんです。一九〇五年の革命というものの構造と、いうのは以下のように総括できるんじゃないか。まずその純粋に経済的な要求が、これは一九〇五年というのは日露戦争が日本にロシアが一応の敗北をとげてかなり国内的にもきびしい状況というものがあつたわけですが、そういう段階においてロシアの工業プロレタリアートが中心となつて経済的な要求というものがどこか出てくる。賃上げの要求なり社会保障の樹立の要求なり純粋に経済的な要求に基づいてストライキが行なわれ、それが自然発生的にデモンストレーションに移っていく。それに対して軍隊が出勤して発砲すると、これはまたいわゆる弾圧ということになるわけですが、これは単なる弾圧たとえば警察が弾圧するといふような問題と少し違うわけです。武装した軍隊との直接対峙といふのは労働者側にとっては、たいへん心理的な意義といふものを持つてゐる。血の日曜日とわれわれ呼んでいる弾圧で、そこへデモを展開した労働者の意識といふものはどの程度のものであつたか。嘆願書といふものがあるわけですが、この嘆願書の最後といふのをここに書き抜いてきたんで読み上げますが、「陛下、陛下の人民を救つて下さい。この陛下といふのはツァーです。陛下と人民の間にある壁を取りはらつて下さい。私たちの願いをかへて下さるように、そうお命じ下さい。そうすれば陛下はロシアに幸福を与えて下さる。さなければ私たちはここで死にます。

このスト、デモ、暴動、市街戦というパターンを経るわけです。そして、労働者と軍隊が直接的に対峙する。それから軍隊がそれに対して虐殺を行なう。それは当然のことながら軍隊について動揺を呼び起こすわけです。しかしながらそれだけでは軍隊の反乱あるいは軍隊の一部分の公規の側への移行といふものは起こらない。それが起きるのは次の段階、つまり軍隊が成立する社会的な基盤そのものがゆるがなければならぬ。社会的な基盤といふのは軍隊を形成している、むしろ当時では騎兵隊の社会的基盤です。つまり都市での労働者といふのは動揺をつくり出すけれども兵士が農民の出身である以上、その農村がゆるがないと事実上軍隊の反乱といふものは起こらない。それまではロシアにおいては御存知のようにナロードニキ知識人は学生が主体なわけですが、それが農村に行つて農村において、何々はいかん、とかその地主を打倒せよ、とかパンフレットを配つたり宣伝をやつたわけですが、ほぼ農民がそれに対してさつぽを向く。ところが一九〇五年の過程ではナロードニキの主体であつた知識人学生ではなく、労働者が直接にデモへいく、そういうことによつて農民を蜂起へ向けさせるわけです。農民が蜂起するといふ段階になると、これは軍隊はこの段階になつてはじめて分裂を起こす。もちろんその軍隊についてのボルシェビキやその他諸党派もろもろの対峙といふのはあつたわけです。軍隊の分裂とその軍隊の一部分の革命の側への移行といふものは単なる外側からのアジテーションだけで

自由と幸福かそれとも墓場か、この二つの道しか私たちにはないので。」「このような段階での嘆願書が出るわけです。これはいつてみれば戦前の日本の天皇制における天皇無罪論みたいな形で、悪いのは天皇ではなくてその側近であるとかあるいはその天皇の意を踏まない資本家や地主たちであるとかという形の構造とかかなりよく似てゐる。ただそういうところをわれわれ見るのではなくてむしろこの嘆願書にあらわれてゐる、さもなければ私たちがここで死にます。」「という死を通してでも要求を実現させたい、そういう確固とした意思といふものの芽生えがここにある。しかし、この正当な要求は軍隊のグループによつてすではばまれる。要求の貫徹をする以上は、軍の武力に対してみずからが力で対決しなければいけない。そういう必要性といふものが労働者の方に生まれてくるわけです。こうした経済闘争の政治闘争への転化が行なわれるその途中で何回も軍隊と衝突し、軍隊から発砲され何人かが死ぬ、傷つく、そういう過程の中で武装自衛といふ問題がはじめて正面から出てくるわけです。さらにそのストライキを継続して起こしてゐるわけで、その過程で武装自衛とストライキの統一指令部といふものの必要がはつきりと見出された。ここで労働者権力の原型である労働者代表ソビエトといふものが史上はじめて成立するわけです。つまりこの過程での力学といふのはストライキからはじまりデモに移りそれから暴動状態に移り市街戦へいく、そういう過程です。一般に都市における武装闘争といふのはほぼ

もないし、あるいは労働者と軍隊との直接的な対峙だけではなく、ほぼ次のような過程で行なわれております。まず労働者と軍隊は直接に対峙する。労働者は次の段階において当然のことながら銃火をあげられて敗北する。さらに軍隊を、農民反乱の側に獲得していく。その過程で軍隊についての考察、あるいは外部からの戦闘といふものが、まさに労働者にとっては期待している兵士たちにとつて、対峙している労働者と労働者自身の出身階層とその理解が完全に共闘であるといふことを考察して宣伝でもって認識させてゐる。それではじめて動揺が分裂に転化する。こうした過程の最先端といふのは、映画でおなじみの『戦艦ポチョムキン』のはじまりだといふようにその軍隊の動揺といふのは、ほぼ特に軍隊が農民的な基盤を多く持っている場合には農村への動揺といふものは直接にストライキに反映するといふことである。これは旧日本の陸軍の問題でもあつた。二・二六事件なんていうのは典型的にそうであつた。一九〇五年の革命といふのはこうした形で軍事的な判断から見ますと三つの形で進行してゐるわけです。一つは都市労働者の問題。経済的ストライキを政治的な記述をもつて理解し、その自衛のために軍隊とは最初は素手でもつて対峙する。次に武装して対峙する。そうして蜂起の主導機関としてみずからを組織して労働者ソビエトといふのを設立していくわけです。これはその労働者ソビエトといふものはレーニンによれば武装で組織された労働者の直接的な権力である。これは彼がパリコミ

レーニンが行なった常備軍の解体、武装した人民におきかえてそれをロシアのところの一部実現したといってもいいわけです。軍事組織というのは特にこれはペトログラドモスクワで行なわれ、武装行動隊のいみの民兵組織がこれを担ってんです。民兵というのはまさに地域組織あるいは自衛組織であり土壌地域でのストライキ、デモ、それに対する敵の攻撃に反撃を行なうという組織なんです。そしてその都市労働者というのはまさにそうした自らの武装というものは民兵という形で形成させている。第二番目に農民というのはどうか。これは、単なる一般農民騒動、農民蜂起で、要するに焼きうちと略奪なんです。第三番目には軍隊。これは動揺した分裂その一部分が革命の側についていた。それで軍隊同士のうち合いになった。しかしながら一九〇五年の革命においてはこうした軍事行動というのは地域的に限定されていた。レーニンは一九一七年ごろには一九〇五年の革命というものをふり返って地方的なちっちな恐怖ということが大量に出てきた時期であると呼んでいる。主に都市部で幾つもソビエトが形成されたところがそれを分散した各地域に分散した闘争というのをまとめあげ、それをまさに中央政府の打倒にもっていくそうした媒体というものがこの段階では存在しなかった。当時ボルシェビキというのは完全な少数派でしたし、内的にはさまざまな問題をかかえていたのであり、はっきりとした指導というものを打ち出せなかった。レーニンは当時、彼は確かスイスにいて蜂起が起きたとい

うことを聞いて何をやったかという、スイスの図書館へ飛び込んでパリコンミュニョンの当時の軍事指導者だったクリザヤの書いたパリコンミュニョンの軍事的総括の本の翻訳をはじめ。あるいは当時の軍事関係の本をいっしょけんめい読む。要するにこうしたかなり分散したバラバラの闘争であったが故に、一九〇五年の蜂起というのは地域ごとに鎮圧されていくわけです。やがて最終的な蜂起の最後の火花みたいな形で十二月モスクワの蜂起が起こる。これはモスクワの武装労働者たった八千名だったといわれますが、八千名の闘争である。政府の数倍する軍隊と戦った。結果的に壊滅するわけです。こうした一九〇五年の革命というものが軍事的にどういう教訓というものを与えているかという、まさにそこまで伸びてきたような軍隊の分裂の問題それについて幾つかの問題点というのを明らかにしていく。もちろんわれわれが現在、軍隊といった場合には当然自衛隊で、自衛隊の社会的な新基盤というのは少なくとも旧陸軍に比べれば、だいぶ曖昧なところがある。その彼らの新階層というのは一体何であり彼らの知識基盤、つまりイデオロギーというのはどのへんの層を主体にしているのか、その分析とその層に向かっての働きかけがない限り、自衛隊というものはなかなか解体する契機というものはないことにはある程度わかると思う。さらにその教訓として与えられているのは、その単なる経済闘争、あるいは多少政治的な意味合いを持った闘争というものは、武装闘争へ移行する段階では急激に行な

われる。そして急激に自分自身を一つの機構組織にしていっていくわけです。ただそれだけでは地域権力あるいは地方権力にとどまってしまう、鎮圧されるわけです。これは単なる一九〇五年の革命だけでなくパリコンミュニョンというものがそういう形で鎮圧されていったわけです。パリコンミュニョンの最大の問題というのは何だったかという、一つには内部的な動揺というものがありパリがまさに孤立し、地方におけるコンミュニョンの独立というものをほとんど不可能な形にして孤立している。したがってパリコンミュニョンというのはまさにフランスプロレタリアートの大前衛になったわけですが、それをつぶしていったのは何かというと、地方からかき集めてきた軍隊なんです。地方と都市との対立というのが生じ、そこでパリコンミュニョンというのが地方の出身の軍隊からつぶされるわけです。そういう意味では蜂起というのは全国的に集約され指導されなければならない、ということも非常にはっきりしてきていると思います。さらに教訓として与えられるのは、都市労働者の武装闘争というのはまず民兵という形をとることである。このことは非常にはっきりしている。こうした教訓という意味で一九〇五年の革命といえるのはわれわれに大体残している。もちろんこれをさらにもっと詳しく二重権力という状態がかなり長く続くという特殊な形で一九一七年に反覆するわけで、その際にもう一度このへんの問題を整理したいと思いますが、こうして一九〇五年の革命の敗北というものはその後数年間にわたって華

命の下降段階というものを経過するわけです。

それではこの時代において一体ボルシェビキというものは何だったかということを見てみると、これはいわゆるバルチザン戦争の時代にあつたわけです。このバルチザン戦争の時代というのはきわめて極秘に行なわれ、あるいはボルシェビキ以外の部分が相当程度行つたという形で頭初はかなり汚点を残すようなことだといふあつたわけです。特にレーニンといふのはだいたいこのことをやったこととはかなり通説的に普及しているわけで、したがってほとんど文献的にこのバルチザン戦争というのを追うことはむずかしい。ですからわれわれは幸いにしてレーニンがこの時代のバルチザン戦争について、『バルチザン戦争』という論文を書いているわけです。これはレーニン全集の第十一巻に入っておりますがそういう論文があつてそのためにかなりそれに幾つかの事実がそこからボルシェビキがどういう形をとつたかということがは明らかにしたわけです。こうやって主としてレーニンの『バルチザン戦争』というものを主体としてバルチザン戦争を見ていたわけです。しかしモスクワ蜂起の敗北に終わってしまう。しかしながら一九〇五年に大きな革命の波があつた。それは当然反革命の側でそれをつくり出すわけです。それは特にロシアの場合には九百人組といわれる反革命組織、それによる虐殺が行なわれた。あるいはその懲罰隊というものをつくり懲罰列車というものをつくり連で懲罰列車に懲罰隊がのっかってどこそこの村に何とか

というボルシェビキの残りがいるというワットとそこへ行って村を全滅するわけです。そうした懲罰隊あるいは完全な虐殺そういうものが反革命のあと、こうした反革命のテロというものに対する自分自身の組織を自衛する、あるいは一九〇五年の革命の炎というのを何とか伝えようという形で革命の側というのは何をやるかというところと、つまりゲリラ戦争ですが、ゲリラ戦争というのは中国あるいは東南アジア、キューバでのゲリラ戦とはちょっと違う、それはむしろ現代の都市ゲリラに近いような形で行なわれている、それはどういふふうな内容かといひますと一つには反革命側にいる個人あるいはその軍隊や警察のおえら方それとかスパイそれと役人、それに対するテロです。それが第一の重要な内容です。それにはいわゆるエックスというやつで、つまり資金というものを政府機関や個人からいただくという強奪、そのテロ強奪というものから成り立ってわけです。これは大体一九〇五年の革命がつぶれたあと一九〇六年にかなり大きく広がって、地方都市、あるいは農村で相当規模で行なわれたしかなりの数で行なわれた。レーニンはこのことを総括して政治危機機というものには先鋭化して武装闘争の段階まで達した。しかし都市や農村で窮乏や飢餓あるいは失業が強まったこと、そのことがこの闘争を呼び起こした原因である。そうやっているのは個々の人間や実に少数のグループでしかなく、彼らの一部分は革命組織に属している。しかしながら、他の一部分幾つかの地方では大部分がど

んな革命組織にも属していないといっているわけです。事実上ボルシェビキはこれに対してバルチザン戦争を、それには相当程度の力を入れたわけですが、バルチザン戦争の主体であったのは何かというところ、これは当時ロシアにおいてかなり存在していたアナキスト、若しくはそのあたりのグループに、あるいはまた当然住民内での革命的分子というんです。これがその当時資金の強奪が革命の波を語っているわけですから。これがその当時資金の強奪を行なうということを行ってわけです。しかもこれはボルシェビキにとってもかなり重要な闘争だったわけですから。バルチザン戦争が最もこの当時強く行なわれたのはラトビアという地方です。そのラトビアでのバルチザン戦争での主導権というものはロシア社会民主党に一部分をなしていたラトビア社会民主党です。ラトビアの闘争というものはバルチザン戦争の基本的な内容としては地主あるいは資本家から金を強奪するとか、あるいは武器をいっぱい、あるいは機関誌に、ラトビア社会民主党の機関紙にスパイの名前をバツと公表して、要するにこいつらにテロをやれ云々という呼びかけをやる、あるいは警察への協力者というものに対してそれを家へ追しかけていって処刑する、まあ殺しはしないわけですが、頭をかったり、ペンキをぬったり、その財産を没収したりするわけです。その没収した金というのは金額の多い場合には党に大部分が渡されて武器を買う資金にされたり、一部分というのはバルチザンの生活費へ、一少額の場合にはたいはいバルチザン

の生活に使われちゃうんですが、その当時のボルシェビキ全体の指導方針としては収奪については、個人財産の収奪は許さない、しかし官有財産というのは党の統制のもとに行ないまた金は奪った金というのは蜂起の準備に使うという条件に従って行なうならばこれは許される。しかし実際には蜂起の準備に使うという条件はそれほど守られなかった。大体拡大解釈されておれの生きていくのも蜂起の準備であるという形で私的に着服されていくわけです。第二にというのは、これはまあ当時の政府監視あるいは局に対しては奨励されると、しかしそういうむだなことをやった力を生じていくという方針だったわけですね、当然のことながらボルシェビキあるいはボルシェビキの一部分からもこれに対するプランキー主義であるとかアナキズムであるとかテロリズムとかかという形での非難があったわけですから。しかしながらレーニンはこの段階ではこうしたプランキー主義であるという批判を断固としてしりぞけたわけです。それからまずこれは武装闘争であるということをはっきりと、したがってそれが一定の必然性を持っている確かにバルチザン戦争というものによっては蜂起の問題というのはいかなるものでもない。しかしながらそれは軍事訓練というものをわれわれに与えてくれる、それはその階級対立というものを根を持って以上道徳的な機関をそれにやっても完全に無意味だ。この闘争というものはまさにその大衆運動が現実に蜂起の段階までできている、しかしながらまだ決戦の

段階ではない。そういう段階において不可避となってくる闘争形態ということはいっているわけですから。しかしそれは一部ではボルシェビキのやつで墮落あるいはレンペン化を引き起こしていたわけですから。しかしながら問題というのはそういう道徳的な批判ではなくて、そういう闘争というものを党の指導のもとで行なわせる、それが重要なんだ。自然発生的に行なわれているのは党の側の準備のなさのためである、といっているわけですから。次にレーニンからの準備のなさに関するちょっとおもしろい引用文を読みますが、それがだいたい、耳が痛いんじゃないかと思いますが、その準備のなさが自然発生的にそういう闘争を行なわせよということに対してレーニンは、だがその社会民主党の理論家や理論評論家の間でこうした準備のなさに対する悲しみの感情ではなくて、高慢な一人よがりのそういう若いころ丸暗記したプランキズム、アナキズム、テロリストについてのきまりきった文句のうぬぼれをくり返し、そういうものを見るととき私は世界で最も革命的な学説のいっ加減に非常に腹が立つと、いうことをレーニンはいっているわけですから。つまりレーニンにとつてはバルチザン戦争というものは一九〇五年なら五年という大きな一つのり上がりがあった、しかしながらそれが敗北する。次の決戦にかなり長い時間が次の決戦まである。そういう段階においてボルシェビキがまさに武装闘争として提起しなければならぬ重要な闘争形態の一つである、ということをはっきりとさせているわけですから。つまりレ

レーニンの態度というのはバルチザン戦争というものは階級対立にある、したがって必然的なものだ、そうである以上はそれを支持しその上で党のもとにそれを置くという、そういう権力をつくらなければいかん、それが第一。第二点で党の態度が貫徹されるならば、しかしその階級闘争の大海戦なら大海戦、そういうものとの間に比較的長い時期があった場合にはそれはただこのことを悪のために支持されるしある段階では奨励されると、それがレーニンがバルチザン戦争に、そこからかかった態度はレーニンを中軸とするボルシェビキの態度だった。残念ながらバルチザン戦争についてはどういう過程で消滅していったのかというものはあの段階では非常にはっきりしているわけです。ただやはりわれわれが注意すべきなのはバルチザン戦争というのはゲリラ戦争ですね。

というのは唯一の闘争形態ではないというよりも他の主要なものに従属しているしその中行なわれなきやいけないうことなんでしょう。都市ゲリラというものは一都市ゲリラ一般といってもいいわけですがこれは決して戦略的な役割を持ちえないということとは非常にはっきりしているわけです。これは都市ゲリラに関する限り、われわれの持っている最高の教科書というのはブラジルのマリゲラの書いた「都市ゲリラ教程」という本ですがそのマリゲラ自身もつまり都市ゲリラの位置づけと戦略的な位置づけというものに対してはそれは戦的な役割しかなえないということとで非常にはっきりしているわけです。都市ゲリラというものは

は決して闘争の主要形態ではないし、その支配的な形態ではない。問題は都市ゲリラというものを絶対化することではなくてわれわれにとつて農村とは何か、主戦場というものは一体何であるか、それは一体どのように戦かわれるかと、そういうような問題との関連でもって都市ゲリラというものは問題にされなければいけないわけです。

ここで一七年の革命に入るわけですが、その前に多少ソビエトの問題というものを見ておきたい。ソビエトというのはつまり評議会ですね。これは一九〇五年にはじめて成立し一九一七年の二月革命という過程で設立されたそういう機関であるわけですが、それは何かという労働者ソビエトなら労働者ソビエトでは、自分が直接にそこでは加わって選挙を行ない、指導をまた行なうことができる。ソビエトに参加しているメンバーというのは自分自身が一つの行動なり何なりについて決議を行なう同時にみずからが、その決議を実行する義務を持っているわけです。つまりパリコミューンと同じ構造を持っている。しかしまさにパリコミューンというものはみずからパリという一つの地域において一つの都市においてコミューンを組織し、コミューンというのはパリを統治するわけですがまさにそのコミューンに対するマルクスが『フランスの内乱』においてプロレタリア独裁の機関であるという、そういう理論的な位置づけを行なっているわけです。そのプロレタリア独裁の機関としての基本的な性格というものは一

体何か、といいますがソビエトつまりコミューンというのはロシア国家というものは基本的には二権対立があるわけです。二権分立といいますが本来憲法では三権分立ということになってますが、これは憲法の条項を見ればわかるように事実上その司法権というものは執行権の中に吸収される構造を持っているわけです。したがって執行権と立法権とつまり大ざっぱにいつてしまえば執行権というのは政府であり立法権というのは議会であるわけですがその二つ分立しているところがコミューンあるいはソビエトというものはそれを統一してまさに一つの行動体ワーキングデイとしてその二つを合体するこのコミューンというのはまさにプロレタリア独裁の機関なわけですがそうした意味で一つの国家であるけれども、ブルジョア国家とは異なった次元における国家つまりブルジョア国家における基本的な対立を止揚した国家というふうに見たほうがいいというわけです。したがってプロレタリア独裁というものは多少話はそれましたが、プロレタリア独裁というものは単にプロレタリアートのみならずから暴力を握って暴力のみずからの手にして、みずからの位置を全社会的に貫徹させるということだけではなくてそれをプロレタリア独裁の組織主体というものの、その機関というものが存在して、その機関を通じて統治すること、というのがプロレタリア独裁の最大の問題なんです。そうしたまに組織的な内実を持っていないのっぺらぼうのプロレタリア独裁というものは、まさに本来的なプロレタリア独裁で

はないと、はっきりいっていないのではないかと思えます。

一九一七年の二月革命というものというのは軍事的にいえば、ある程度一九〇五年革命の反覆だったといえるんです。ただその第一次大戦というものが背景にあったわけでそれは日露戦争とは相当程度比較にならないほど労働者農民というものを、したがって軍隊の道徳的な解体というものはより一そう深い形で引き起こしているわけです。たとえば蜂起の根というのは非常に深く一九〇五年よりかはるかに深くその部隊である軍隊というものは一九〇五年よりかはるかに弱体化している。ただまた二月革命と一九〇五年革命の違いというものは、一九〇五年の革命においてはソビエトが成立するのは反動政府と拮抗しつつ行なわれたと、ところが二月革命では反動政府というものが完全にふっとんでしまう。そのあとでいけば当時のブルジョアジーですね。それを主眼にした臨時政府ができてその臨時政府の設立と同時にソビエトができる。つまり二重権力という形でもって設立される。そういうところが一九〇五年と二月革命の違いになっているわけです。ソビエトというのはいいましたように過渡期の権力であり権力機構でありプロレタリア国家というものである。そのはずであったんです。ところが、二月革命のあとソビエトができた、それと平行してブルジョア政府ができてちやうわわけです。このために十月革命に至る過程というのはかなり複雑な、いってみれば奇妙な過程ということができるわけです。実際上の権力というものはソビエトが持つ

ていたわけですが。軍隊というのは当然に委員会をつくり兵士ソビエトを選出し、労働者ソビエトは最初から武装していく直ちにみずから労働者民兵ラボチヤイミンチア労働者民兵に組織していくわけですが。この意味では労働者兵士ソビエトというのは、まさに武装した人民そのものであったし事実上権力の淵源であったわけですが。とはいえそれだけがロシアにおける武装した部隊だったわけではないわけですが。当然のことながら当時彼らがロシアは当時ドイツと東部戦線でもって戦っておりましてそこにおいては、やはり旧軍隊というものにはやはり存在していたわけですが。臨時政府も命令によって動かす軍隊というものを幾つかあったわけですが。確かに軍隊に対する臨時政府の権限というのはいへんあまいではたして、臨時政府が命令を下した場合に部隊が命令どおりに動くかどうかかなり疑問視されていたわけですが。その旧軍隊の解体というのはいへん状態であつたわけであつた。そのために次第に数は減少しているにしても十月革命まで臨時政府というのはいへん部隊といふものは、つまり自分たちの武装部隊といふものができたわけですが。自由側からは――大佐コザツプ兵士軍事的な力量からすれば当時の労働者ソビエトが臨時政府を打倒するということは非常に簡単であつたわけですが。即座にという可能性はあつたわけですが。ところが当時ソビエトといふものベトログラードを中心として設立されたソビエトといふものは内部でこのころは、これはメンシェビキが握っていたわけですが。またボルシェビキも当然いたわ

けですがボルシェビキの一部分といふのは実際レーニンがいわゆる有名な……列車で帰国するものは政府のほとんど大部分がソビエトと現に存在していた。ソビエトといふ事実上の権力とそれからブルジョアの臨時政府の関係といふものに、非常にあいまいな態度をとつてきた。そのためにソビエト唯一の権力としていた全体を支配するといふ、そういう積極的な行動に踏み出さなかつたわけですが。まさにこうしたいってみれば硬直状態みたいな状態が永遠に続いていく。もしも臨時政府がこの段階で合法性の衣を着て権力を拡大して自分の権力を次第に拡大しソビエトの武装解除をします。また完全に解体して軍隊を身につけていくならば一九一七年の革命といふのは二月革命だけで終わる全くのブルジョア革命に終わってしまう。そうしたことを最も心配したまた外にあつてかなり遠くにあつてくやしがつていたのがまさにレーニンなんです。彼は直ちにスイスから連邦への手紙といふのを送つて、これは労働者に自分の力自分の組織自分の団結、自分の武装それだけに頼るとそれ以外は、一切信用するなと、臨時政府を直ちに打倒せよといふ呼びかけを最初にやつたわけですが。そのあと――列車で帰国したあと有名な四月のテーゼ、その四月のテーゼの内容といふのは何かというところと革命を第二段階に移すつまり全権力をソビエトに移す、軍隊は廃止する。全人民の武装をそのかわりに貫徹させるということなんです。公式の途としてはこういうことはかなりはっきりといわれていないわけですが、最近か

なりははっきりしてきたことは、このレーニンの 相当といふのは最初ボルシェビツの内部の中ではほとんど見られていなかつた。レーニンは完全に四月の段階ではテーゼを発表し、それを中央委員会の再決にかけようとした段階においては、完全に少数派にとどまつた。ところが彼自身がその少数派であるみずからを多数派に転化するためにむちゃくちゃな努力をする。また労働者に対してプロレタリアートに対して直接に支配するといふ形でそれを急激に扇動していくといふことはボルシェビキ内部に彼自身の見解が多数派として形成されていくわけですが。そのテーゼについて軍の問題、軍事の問題といふのは大体公共になっていきます。まず全人民的な民兵を創立する。それを軍隊と併行させるそれによつて常備軍を全人民の武装にかえていくそれは四月テーゼにおけるレーニンの軍事問題についてのテーゼだった。そのためにはまず現在武装している部隊がソビエトにある、その意味では臨時政府の武装解除要求といふのを断固発表する。民兵を強化するさうに、軍隊についての扇動といふのは一そう激化させていくといふのが直接なんです。それでは一体その最初にいたしましたように直ちにソビエトといふのは特に労働者ソビエトといふのは労働者民兵といふものをつくらせていくわけですが、その後には分解して赤衛隊といふものをつくりその赤衛隊といふものからかなり大きな飛躍をとげて赤軍がつくられていくわけですが、その民兵労働者民兵といふものは一体何であるかといふことをこの度は少し述べてお

きたい。労働者民兵といふのは当時はまずもつていわゆる通常の民兵組織だつたわけですが。いわゆる民兵の問題といふのはそれは革命の問題として提示されたのは当然のことながらパリコミューンが最初で、それをマルクスがフランスの内乱が総括した結果その後には第二インターナショナルの時代、まだこの段階では第二インターナショナルの時代なんです。第二インターナショナルの時代には大体プロレタリア革命の軍事綱領といふのは民兵論なんです。この中で最も重要だつたのはジュールゲードといふフランスの社会主義者で断固とした反戦主義者だつたので第一次大戦がはじまつた直後に暗殺されておりますがそれをつくつたそれを書いた新しい軍隊といふものの、このジュールゲードの基本線といふのは何かというところと一方においてブルジョアといふのは常備軍正規軍それに対して、われわれが対峙するのはプロレタリア的な民兵をといふ形の民兵論なんです。ロシア革命は当所の段階においては、まさに労働者民兵をつくることによつて大体パリコミューン以来の第二インターナショナル、ボルシェビキも大体この段階では民兵論だつたのでその路線に忠実だつた。その任務といふのは何かというところと革命秩序の防衛といふのが主要な任務だつたわけですが。したがってベトログラードソビエトの労働者民兵といふのはまず何よりもベトログラード市内の警備に移したといふのは、事実上この段階では解体しているという、だから警察といふのは大体憎まれてますから、ここでちょっとまた協道にそれま

すけれども革命の過程における軍隊と警察の関係というのは非常に  
おもしろいものでトロッキのロシア革命史という名著が今だに  
ロシア革命史ではおそらく世界一の文学だと思えますがそれでは  
民衆の反映というのは軍隊を警察に対しては抹殺します。たとえ  
ば軍隊がやってくるに民衆はそのまわりを取り囲みその軍隊を自  
分の中に動化させようとする警察がくるかどうかというとい  
応その段階では労働者が対峙するとはあさんがしびんをなげると  
いう、そういう構造なんです。つまり警察というものは、最初か  
ら動化の対象にならない。したがって二月革命のあとでは警察の  
抵抗というのは相当程度重要に行なわれて労働者がデモをやると  
屋上にかくれていた警察がそれに対して発砲する。かなりテロ的  
な活動というのをやっているそれを見て軍隊の方から頭にきて、  
それが警察が潜んでいる建物に対して一斉射撃を加えて警察を、  
警官を射殺するという形で警察と軍隊の分裂と、対立というのも  
起こってくるわけですけども事実上、そういう形でペトログラ  
ード市内だけであって当然のことながらモスクワとか、ソビエト  
のあったところでは、ほとんど旧警察というのは全滅させられて  
しまうわけです。労働者民兵というのはまず警察の役割を果たし  
たわけです。それで一定程度の成果が上がると次は工場あるいは  
企業を、労働者民兵というのはまさに工場から出ているのであ  
って労働者だったわけで工場や企業の防衛という方に力点が移され  
ていったわけです。しかしながら労働者民兵というのが出てくる

のは三月段階なんです。その三月段階で労働者民兵というのは一  
体どんな権力のもとにあるのかという論争がペトログラードソビ  
エト中心として起きはじめるんです。臨時政府というのは当然の  
ことながらそうした人民が目の前にいるのに対してたいへん恐  
怖を持っている。ところが自分の方が弱いんで正面切って攻戦を  
かけられない。それに対して武装解除はできない。われわれがそ  
のためにどういふふうな手段をとったかという警察が解体した  
ということ。それを口実にして都市民兵という……、グラードす  
なわち町、それを守る民兵、日本では労働者民警というふうに訳  
されているわけですがミンツァ、ミンシャむしる民兵なんです。  
その都市民兵というものを上からつきあってそれに労働者民兵を  
吸収しようとするわけです。ボルシェビキは最初の段階では一定  
程度補助して都市民兵に対して労働者民兵は編入させることを認  
めるわけです。しかし武器は手放さない。組織的にも労働者民兵  
は、都市民兵の中にあって独立性を持つということを確認する。  
この労働者民兵というのは政府の側から、かなり大きな財政的圧  
力をかけられている。政府の方が手をまわして……工場があつて、  
そこから労働者が出てくるわけで最初の段階では労働者民兵とし  
て働いている時間に対しての給料が支払われたわけですがそれに  
対して臨時政府の方が資本家に対して圧力をかけて賃金の打ち切  
りをやるという形で財政的な圧力がかかってくるという形でかな  
りの程度の労働者民兵が減少していく。それに反比例して都市民

兵というものが力をましてつくわけです。このボルシェビキの方  
はかなりあせるわけで、まさに新しい武装機関というものをつく  
らなきゃならないということが問題になる。これはほぼ四月の段  
階ではつきりしている。ここで赤衛隊というものが登場してくる  
わけです。したがって労働者民兵の中でまだはつきりとした階級  
的な意識を持っていた部分というのは赤衛隊の方へ移っていく。  
労働者民兵という一つの段階への民兵路線というのは、一方での  
都市民兵つまり臨時政府の方から組織していく。都市警察にそっ  
ちへいくそっちへ吸収されていく部分、それからボルシェビキが  
中心となつてつくっていく。赤衛隊とその二つで完全に分解して  
いってしまうわけです。赤衛隊というのが、それでは労働者民兵  
とどこが違うか。

ペトログラードというのは幾つかの区に分かれている。それを  
サブに分けて、そのサブをさらに又、十人ずつに分けてそういう  
段階的な組織となっているわけです。もちろんその主軸となつた  
のは、当時のモスクワなりあるいはペトログラードでもって最も  
重要な役割を果たしていた工場労働者ですが、それだけではな  
くて、当然のことながら、学生からルンペンプロレタリアート、  
なんでも入って来たんです。相当程度の層を含んでいるんです。  
その赤衛隊のイニシアティブというのは何がとったかという点、  
これはソビエトが最初からとったわけではない。むしろポリシェ  
ヴィキそれからメンシェヴィキ左派、それからエスエル左派、ア

ナーキストそれが指導権を取って、ソビエトの多数派を占めてい  
た、メンシェヴィキ右派というのはむしろ、赤衛隊の推進に対し  
て反対だった。都市民兵で十分であるというのが彼らの考えだっ  
た。でまた、赤衛隊がいったん結成された後は、ペトログラード、  
ソビエトの、つまりメンシェヴィキ右派の指導下に置くために、  
メンシェヴィキ右派のほうからそれをソビエトの統制下に置く、  
ソビエトの武装機関にしようという働きかけがずっと行なわれた。  
ところが赤衛隊の基本的な核であったポリシェヴィキというのは、  
ソビエトの統制下に置かれることに絶対的に反対だった。したが  
ってソビエトと赤衛隊の関係という論争があり、ある程度、最終  
的な結着をつけなければならぬ段階になった時、ソビエトとの  
密接な統一ということがで逃げた。独自性というものは確保  
した。こうした赤衛隊の教というのは、ペトログラードで、大体、  
六月末あたりで、約五千から六千ぐらいあった。幸いなことに、  
少し前、一応十回大会の後に、多少ソビエトにおいて、雪溶け  
という現象が行なわれて、その間かなり、いわゆるいまま、わ  
れわれの目に触れられなかった文書というのがずいぶん交換され  
てまして、ペトログラードでの赤衛隊、あるいは労働者民兵の間  
題というのは、ペトログラード軍事革命委員会という二刊の大変  
大きな資料をロシアに持っている。スタルチエフという男がペト  
ログラードにおける、ロシア民兵、赤軍派、労働者民警から赤衛  
隊へ概説史みたいなの十冊くらい送る。そういう意味では、相当程

度ベトログラードについては、赤衛隊の問題とあるいは、その前史なり後史なりというのをはわかるので、これから話は、主としてベトログラードに限定します。

六月末のカステラマ戦争の五千から六千ぐらいの部隊、武装は整備していたけれども、それほど優秀な武装はしていない、というのが赤衛隊の現状なんです。ところで、ロシア革命史について何か本をお読みになった方は、御存知かもしれませんが、七月の初めにポリシェヴィキはかなり精鋭なデモを展開する。ところが、その組織化に失敗し、一種の簡単な自然発生的な蜂起みたいなものを臨時政府に鎮圧されてしまう。その七月のデモの失敗というもの、臨時政府に赤衛隊の武装解除、あるいは解体、そういう口実を与えた。臨時政府は、一全体、赤衛隊の指導部というのは、ポリシェヴィキですが、それをかたっぱしから逮捕する。そして、ポリシェヴィキの党のほうの指導者も大体逮捕されて、トロツキも、つかまって、監獄にぶち込まれた。レーニンに従って、となりのノルウェーに逃げこむわけ。こうした意味で赤衛隊というのは、この段階で、非合法面に移行するわけです。しかしながら非合法活動をやりながらも、その組織的な努力というのは、かなりの程度確実に行なわれてくる。大体、八月の初め、つまり六月の末からほぼ一カ月ちょっとすぎた時の赤衛隊の数というのは、一万四千ぐらいだった。ほぼ二倍以上に増えています。そして、赤衛隊の指導機関として、ポリシェヴィキの後に縮小されてしま

のは再度合法化される。赤衛隊の中央司令部というのはこの段階で初めて出来るわけです。この赤衛隊の中央司令部というのは、ポリシェヴィキが非常に強力なイニシアティブを持っているわけです。ところではいままではこうした動きを見ますと、いわば赤衛隊というのがソビエトの武装部門でもないし、といって当然のことながら、臨時政府の武装部門でもない。いってみれば、これは党派軍団である。党派軍団といっても、それはポリシェヴィキ、あるいはメンシェヴィキ左派、それから左翼エスエルとアナキストといった、かなり混成軍なわけで、そういう党派軍団として組織されている。そういう赤衛隊というのが九月を機にして、この段階で初めてソビエトの機関に転化される。つまり九月に入ると、ベトログラード、あるいはモスクワで、大体ソビエトで改選が行なわれて、ポリシェヴィキが多数派をとるわけです。その多数派をとった段階で初めて、ソビエトつまり大衆的な統治機関、その武装部門としての赤衛隊というものがはっきりしてくる。つまり、赤衛隊はいままでの党派軍団であることを徹底的に放棄して、ソビエトの軍事部門、軍事舞台という形でみずから移していくわけです。で赤衛隊というのはソビエトの支配下に入る。そして十月の十三日ソビエトのもとで軍事革命委員会というのが結成される。これはベトログラードソビエトの完全な指揮下にあって、その議長は誰かといえば、トロツキーだったわけです。つまりベトログラードでの蜂起というのは事実上はトロツキーと、

うわけですが、トリフォノフという人間、これは赤衛隊の事実上の指導者みたいなものですが、の提案になって、五人組というのが作られた。その五人組の指導のもとで、武器の収奪をやる。

この武器の収奪というのは、当然のことながら、あちこちの兵営なり、あるいは要塞なり、あるいは武器工場まで行って、かっぱらってくるわけですが、そこで最も活発だったのはアナキストで、これは実に収奪に関しては喜々として大量の武器をこぼらってきた。赤衛隊の相当程度の武装というのは、アナキストの活動によって支えられていたわけだ。こうして赤衛隊の数の増加と非合法面に移されては、最も数が増加し、相当程度の武装が進んでいる。しかしながら、その武装はかなり貧弱なものだったわけですが、その武装の問題を解決し、もう一回その合法面に赤衛隊があらわれてくる。というのが、有名なコリネーロフ反乱。コリネーロフがいままでこのポリシェヴィキ打倒ということで、事実上はポリシェヴィキとともに、臨時政府も打倒するという勢いを見せてベトログラードに進撃してくるわけです。それをきっかけにして、ベトログラードの臨時政府も当然のことながら、ベトログラードソビエトも一切がコリネーロフに対する闘争に軍事的な全力をあげて突っ込んでくるんです。この段階で赤衛隊をどうだ、こうだといえなくなりました。公然と赤衛隊というのはみずからの武器を取り出して、コリネーロフに攻撃に対して立ち向かって、それを殲滅するわけです。これをきっかけにして、赤衛隊という

その下にいたポドボイスキー、それと水兵あがりのドイベンコウ、その辺が主体となって主導部を握っている。こうした赤衛隊、軍事革命委員会のもとでの赤衛隊の集約、軍事革命委員会とベトログラードソビエトの議長であるトロツキーによる、赤衛隊の完全な指導部の形成というのが、ベトログラードの内部で行なわれる。と同時にまたベトログラード守備隊に対する呼びかけが行なわれる。またベトログラード守備隊だけではなくて、その近くには当然のことながらバルチック艦隊がいたわけです。そのバルチック艦隊というものをどうやって押えるかということが最大の問題だった。この段階でバルチック艦隊の水兵であったスミルガという男が中心となってバルチック艦隊を煽動して、かたっぱしからそれをポリシェヴィキの前に獲得していくという形になります。赤衛隊の数というのは、十月蜂起の前夜にはほぼ四万から五万ぐらいだったわけです。この赤衛隊の武装というのは、大体において一つには収奪で行なわれ、もう一つはコリネーロフ反乱の段階で政府側から公然と武器をもらい、ところがやはり最大の武器の獲得は何かといえ、ベトログラードをポリシェヴィキが握ったということですね。ベトログラードが工場に命令を發して、「お前のところにある銃何千丁はどこそこの部隊に配備せよ」と、あるいは何とか兵営にある機関銃何丁はどこそこの部隊に配備せよ」という形の命令書をトロツキーがどんどん出す。自分のもとに武器をかき集めてくる。大体、四万から五万ぐらいの武装部隊というのは、かな



り確保できてくる。この赤衛隊というものが中軸となって十月二十五日、臨時政府のこもっているフュイフェー攻撃が行なわれる。フュイフェー攻撃というのは、いろんな本でお読みになった方もおられると思いますが、バルチック艦隊のアウロラ号が近くまで行って、メバナ号をその近くまで行って、それが蜂起の合図をして大砲を打ち込むわけですが、最初の砲というのは空砲ですが、しかしながら軍隊というものは当時のペトログラード守備隊、あるいはヘルシングボルスからスミルガーが連れてきた水兵部隊というのが相当大きな役割を果たしている。むしろ周辺部を固める、あるいは軍事的な要点を守備するという段階なのであって、フュイフェーの突撃というのは、大体、赤衛隊がなっている。要するに、この十月革命というのは、ペトログラードソビエトを中心とした、ソビエトが主導者、そのソビエトというのはポリシェヴィキを中心として、しかもポリシェヴィキだけではなくて、当然のことながら左翼エスエルがおり、またアナキストが入っている。そういうかなり雑多な混成部隊で、主力攻撃部隊というのは赤衛隊、水兵陸軍というのは、その支援組織、そういう構造で、大体十月蜂起というのは担われている。このようにまず党派的な軍団として組織された武装自衛機関、つまり赤衛隊の喪失がまずあり、それがソビエトを左派が獲得するという段階となつて、その武装部門となり蜂起の部隊となる。その蜂起というのは当然赤衛隊の一方での組織、強化、と平行して軍隊の内部解体、

そして一部分の革命分子の獲得という、そういう過程になつていたわけです。赤衛隊というのは御承知のように、十月革命の主力部隊だったわけですが、十月革命以後も当然のことながら存続する。反革命と戦う。また革命をもちこちらに拡張していくための機関として強化されてくる。あちこちの地方に武装宣伝にいたり、ある時にはモスクワならモスクワでの蜂起にも関わるし、ソビエトが存在していない小都市には行ってソビエトをつくり、そこで赤衛隊の核をつくる。あるいは赤衛隊の存在しているところで、まだ敵の権力と対峙している段階ではそれも合体して攻撃をやる。それからして赤衛隊というのは十月革命後も動いているわけです。この段階で新しくできたソビエト権力、新しく成立したソビエト政権というのがあてにできた部隊というのはまさにこの赤衛隊である。旧軍隊と組織はどうなったかという、もうこの段階では解体状態です。ただ一つ、ペラクーンというハンガリーの革命家が組織していた一個連隊ぐらいの数のレット人ライフル部隊というのが唯一のポリシェヴィキに対して、はつきりと自らそれを支持し、それとともに戦かうということを出したわけです。それ以外の旧軍隊というのは、大体において完全に戦意を喪失しているし、その皆な戦線から逃げ出して村へ帰ってしまふ。したがってこの当時、ソビエト権力が、あてにできた部隊というのは、まさに赤衛隊とレット人ライフル連隊ただ一隊だったというふうにいえるわけです。ケレンスキーの反乱という

のは、大体この部隊だけでもって守備ができたわけでありまして、ところがケレンスキーの反乱が一応つづけた後、あちこちに、旧ツァーの軍隊の將軍たち、あるいは、ケレンスキー内閣の將軍たち、そういうものが外国の支援を公然と受けて、あちこちで反乱を起こしていく、これは相当程度の軍隊というものを動員し、かなり武装力を持った反革命軍をあちこちのところで形成していく。またドイツ軍の攻勢というものが一方で後に続く。こうした反革命軍、ドイツ軍というものに対処するには、民兵組織だけではいかんともしがたいということがかなりはっきりしてくる。民兵組織というのは、まず地区というものを基盤として、基本的には防衛闘争部隊、したがって攻勢に出るときには、大変弱い。また武装も非常に貧弱であるし、何よりもまず雑多な部隊だから、工場労働者が主体であるならまだしも、学生や、ルンペンプロレタリアートその他いろいろ混ざっているということをいいましたが、まさに非常に雑多な部隊であり、規律も何にもなかったわけですから、要するに武器を持ってある赤衛隊なり何なり入れたいというふうにいえば入れてもらえたわけでは、したがって実に様々な分子がいたし、ある段階では非常にむちゃくちゃなこともよくやったわけですが、ペトログラード軍事革命委員会がフュイフェー攻撃の後に出した最初の命令の一つは何かといえ、酒を飲むな、という命令なんです。これは実に赤衛隊というのはフュイフェーを落としたあと、あちこちの酒屋を襲ってかたっぱしから酒倉をあけて

酒を飲んだわけです。一時的には一日か二日ぐらいの間、事実上ペトログラード赤衛隊というのは用をなさなくなっちゃった時代があったわけですから、全部酔っぱらっちゃって、軍事革命委員会は非常に頭にきまして、要するに酒は売らさない、作らさない、売った場合は銃殺である。酔っぱらったやつも銃殺である。というところで大変もったいない話ですが、フュイフェーの地下にツァーの飲むためのブドウ酒数万本があったわけですが、そのフュイフェーの地下小屋に水を入れて全部だめにしちゃった。ま、そのくらい赤衛隊というのは、ある意味では規律のいきとどいてない部隊だったし、めちゃくちゃで訓練もいきとどいてないし、武装もさまざまだし、そういう部隊だったわけですから、そういう意味では組織化された正規軍の攻撃に対して、又相当程度大量な正規軍の攻撃に対し、反撃し、それを打ち破るということはいかんともしがたいような状態だったわけですから、そのことをポリシェヴィキがはっきり認識した段階で、いわゆる赤衛隊から赤軍への飛躍が行なわれる。これはまさに労働者民兵が解体し、赤衛隊になつていく、一部が転化していくという過程よりはむしろ非常に大きな質的な飛躍である。赤衛隊から赤軍へというならかな過程を取っているのではないということをおぼろげにしておきます。最初に十七年の革命のあとに、十八年の一月十五日に労働赤軍の設立が宣言された。つまりちゃんとした民兵組織ではなくて正規軍がいるという創立が宣言されるわけです。現在のところでは

ソビエト権力の中軸会で近い将来は国際的な軍隊となる、そういうものの核をつくらなければならぬという呼びかけがソビエト政府からなされ、労働赤軍という名前で掌握されている。ただこの労働赤軍というの出発点においては志願兵制度だったわけです。したがってまさにボランティアだって、赤衛隊のグループがボランティアに入った場合もあるし、旧陸軍の中から、みずからがそれに入りたいといって加わったケースもあるし、様々だったわけです。もっともこの労働赤軍というのは旧軍隊との最大の違いというのは何かというと、まず第一に、隊内での階級というものを一切廃止したということ、將軍から、一等兵、二等兵にいたるまで、階級というものを一切廃止してしまっただけです。しかしながら部隊の指揮官というのは当然要るもので、その指揮官というのは兵士の直接選挙によって選ばれた。こうした直接選挙と軍隊内の階級のなさ、というのが初期の労働赤軍の基本的な特徴だった。これはいつてみれば、パルチザン原則を正規軍の形成の過程の中で最大限取り入れようとした。そういう過程だったわけです。この労働赤軍というのは決して赤衛隊の発展形態ではなかった。赤衛隊というのはさっきもいきましたようにかなり雑多な部隊であった。一応反革命の危機というものがベトログラードから遠ざかった。また反革命軍というのは組織的には地方に点在していたわけですが、ベトログラードの近くにはあまりいなかった。そうした反革命の危機が去ってしまうと、ベトログラードソビエト

たことはないわけがこの当時東部戦線でドイツ軍が動かしていた軍隊というのは、大体三十万といわれています。それ以外に反革命軍が万単位であちこちいたわけですが、相当程度レーニンの期待を裏切った。レーニンは志願兵制度を最初から主張していて、おそらく真の労働者政権であるソビエト政権がアピールを出した場合には、おそらく万単位での入隊が相継ぐであろう。あつという間に一つの軍隊ができるのであろうと期待していたわけですが、ところが実際には農村が完全に疲弊して都市の人口というものが支えきれなくなりました。農村と都市の間での物資の交流というのはほとんど不可能になってきた。いわゆる農村というのは完全に自分の中に閉じ込めて自給自足体制に入っていくわけです。そういう段階ではなかなか外に出たがらない。また前線のモラルというのはメチャメチャに解体してしまっただけで、二度と銃を取るのはいやだ、たとえそれが祖国防衛のためであっても。そういう雰囲気がある程度農民や労働者の間にあって、一万五千程度の部隊しかつくれなかった。全く数の面ではレーニンたちの期待を裏切ったんです。したがって労働赤軍というのは何とかしなきゃいかんという形で、最初の段階では外務大臣・外務人民委員だったトロツキーというのを、外務人民委員の席からはずして、彼に軍事指導の最大の権限を与えた。そのトロツキーの指導のもとでまず指揮を統一し、次に義務兵役制度というのを導入していくわけですが、もちろん最初の段階での労働赤軍に加わってきた志願兵数の方の、

の下にいた赤軍というのは解体し始める。それはなぜかというと、食えなくなるわけですが、具体的にいえば、都市ではほとんど生活できないということ、それでは農村に行こうということになり、皆農村に帰っちゃうわけですが、そういう意味では、赤衛隊というのはかなりこの段階で混乱している。また赤衛隊の中部には、先程いきましたように雑多な分子がいて、必ずしも社会主義防衛、社会主義政権の防衛というものを、みずからの任務であるということを考えていなかったわけですが、酒を飲むということをまさか革命として考えたわけではないでしょうけれども、赤衛隊の名前を語って、語ってというより赤衛隊だったわけですから、その名前を使って収奪をやり、一定程度の金を自分で手に入れるとそのまま赤衛隊からさっと逃げ出しちゃうわけですが、まさに労働赤軍というのは、こうした赤衛隊というものはなしに、むしろそれとは別個なグループ、主として先進的な、献身的な形で活動していたポリシエヴィキですが、ポリシエヴィキと、それに呼応している旧軍隊の下級兵士それからごく赤衛隊の一部分というのが、労働赤軍の出発点です。確かに志願兵制という制度を行ない、特に十八年二月の二十二日に有名な「社会主義祖国は危機に瀕している」というアピールが出された。当時ドイツ軍が大攻勢を行なってきたわけで、つまり志願兵というのはざっと増えていくわけですが、ほんの二・三日の間に一万五千名の人間がほとんど赤軍に志願する。しかしながら、数日間でも一万五千といってもたいし

数は少ないにしてもその志願兵となり、それが核となったわけですが、そのあとの部隊というのはいわば労働者農民を強制的に徴兵していく。強制的な動員を行なって、あつという間に軍隊が増えていくわけですが、内乱の最盛期、大体十九年から二十年にかけてですが、ほぼロシア国内ではソビエト政権は五百万の軍隊をつくらなければならず、その五百万の軍隊の大部分というのはトロツキーが強制的に組織した軍隊です。トロツキーは軍隊の内部においても一大改革を行なうわけですが、一つには今まで行なわれていた指導指揮官の選挙制度を廃止する。指揮官はソビエトが任命する。また第二には、旧軍隊の専門家というものを軍の中に大量に導入していく。この旧軍隊の専門家を使うという形で、彼らに対して、それはプロレタリア的な原則からの逸脱であると、そういう反論がスミルノフ、あるいはスミルガーといった軍事指導者の一部から生じてくる。軍事反対派といわれたグループですが、それとの間でトロツキーとの論争が、大体第九回大会あたりが一番最盛期になるわけですが、行なわれるわけですが、もちろん旧軍隊の専門家を扱うといっても、それだけがそれを司令官に任命して、それだけでほつとくわけではなくて、当然のことながらソビエトが任命する政治的なコミッサールというのを仮につくる。ただ純粋な意味で軍事的な面については、軍事指導の面では、旧軍隊の将校クラス・下士官クラスになるわけですが、その下士官や将校クラスがその指導権をとる。たとえば軍隊の配置をどうやってやるか。

あるいは敵に対してどういう攻勢をかけるかと。ただしその他の一切の仕事というのは政治コミッサールが担うわけです。その政治コミッサールと軍事コミッサールと両者によって部隊を統率していく。もちろん一方では、トロツキは規律と命令とそれに対する服従というものの観念を上からどんどんたたきこんでいくわけです。たとえば一步も前進するなという命令を下した。一步も前進するなというのにも後退する。ということになるとまずその軍隊の教育が間違っているということで、政治コミッサールを銃殺しちゃうわけです。あるいは多少その点で問題があるわけですが、ポーランドのポリズスキーという反動が、ポーランドの軍隊をつかっでフランスのバックアップを受けてロシアに侵入する時がある。そのときにポーランドとロシアというのは大体において、大変仲が悪い。ドストエスキーなんかの小説を読むと、ポーランド人なんかはよくばかにされているところがある。そういうロシアの中にはポーランド人に対する蔑視感というのが延々につちかわれているわけです。ポーランド軍と戦って、一応ポーランド軍が殲滅されるわけですが、その段階で非常に残虐なことをポリシェヴィキの軍隊がやる。その場合にトロツキの命令は何かというのと、ポーランド人捕虜に対して手を振り上げたやつはその手を切り落とすと、そのくらいにまで厳しい命令というのを上からたたき込んでいくんです。このように一方では軍隊の大部分の核というものをトロツキは強制的な動員方式でもって獲得するわけです。

その獲得した軍隊の指揮というものを旧軍隊の専門家を引きぬいて、それに政治コミッサールをはりつけるといって形成していく。もちろんこうした旧軍隊の専門家の中から将来のいわゆる元師ですね、大体、当時から一九三五年ぐらいまで赤軍というのの階級を持たないわけですが、三五年だっと思えますが、階級制度が復活されて元師が五人くらいできるんですが、その元師の大部分というのはこういう旧軍隊の専門家です。それから内部においては、今、いきましたように指揮官の選挙制というコミューン的な原則というものを廃止して、上からの規律、あるいは命令というものに対する徹底した服従というものを要求しているわけです。つまりこうした過程を見えますと、革命そのものの過程、蜂起の過程というものは、その主体は民兵としての赤衛隊が担うわけです。しかしながらその後の反革命軍、あるいは外国軍隊の干渉、そういう段階で組織的な正規軍と対峙するためには、どうしても民兵組織では不十分である。もちろん一方では、バルチザン戦争をやればよい。ロシアの土地は広大なのであるから、奥地へ奥地へとひっこむことによってバルチザン戦争をやればよい。そうすれば十分に勝てると、かつてナポレオンの軍隊を、ツァーリの軍隊が殲滅したならまさにひっこんで、兵站線をなおして、それをゲリラでつぶして、兵站線を完全に消耗させて最前線の軍隊を孤立させてそれを打ち取るわけです。そういう方式をつまみ、ゲリラ戦争方式をやれというグループもあったわけです。しかし

ながらゲリラ戦争方式がしりぞけられたのはなぜ、一つにはロシアにおける工業化というのが、ナポレオンの時代とは全く違ったレベルでもって進んでいる。その都市を蜂起することはちょっと不可能なんです。都市を蜂起して簡単に農村にひっこんで、バルチザンをやるにしたって、では一統をどうして作るのか、弾薬をどうやってつくるのか、大砲をどうやってつくり、戦車をどうやってつくるか、そういう問題というのは常にバルチザンの場合にはあるわけです。正規の軍隊とバルチザン戦争で対峙することはできないという判断が働いてバルチザン戦争の線というのは捨てられてくるわけです。したがって、また民兵もだめだということとで、そうした干渉戦争というものが始まった段階で正規軍の形成。強制的な徴兵制に基づき、上から任命された司令官というものがある強制的な権限を持って指導に当たる。こうした正規軍の形成というものが行なわれる。これが赤軍になる。その意味では赤軍というものは労働赤軍の初期の段階でワンステップを経るにしても、赤衛隊とは全く違った組織形態を持っている。この正規軍というものはいつてみれば、マルクスがパリュムニオンの中に見た過渡期の国家、その国家の原型である。つまりコミューン原則ですね、それからかなり大きな逸脱を示すわけです。マルクスの場合には、何やかんやいっても、常備軍は解体せよ、正規軍は解体せよ、それは武装した人民つまり民兵によって置き替えるという思想だったわけです。そこからトロツキたちはレーニンも

そうなんですが一かなり大はばな後退を示すわけです。それに対して、スマイルノフたちが食いついて、民兵路線の主張をやっているわけです。軍事反対派というものを形成して、大体において論争を延々と続けているわけです。トロツキの「革命はいかに武装されたか」の第一刊、これは十八年を扱っているわけですがほぼ軍事専門家の問題、コミッサールの問題、あるいはコミューン原則、軍事反対派との論争の問題というものを大体においてカバーしている。トロツキの側での論拠というものを興味ある方はこれをお読みになればわかるはずですよ。

以上のようにロシア革命の内戦の時代には、レーニン、トロツキを主体としてはっきりとした正規軍方式、強制的な徴兵制、それから正規軍の形成という方式が取られているわけです。実際、現在考えてみますと、十月革命当初の民兵、その後続く第一期の労働赤軍のいわゆる将校選挙制度というもので内戦が戦かわれ得たか、貫徹し得たかどうか、かなりわれわれが疑がわしいと見てもいいのではないかと。もちろんそのまま、歴史を仮定形ということではあまりいいことではないわけですが、もし民兵路線のまま突っ走っていたならばおそらく外国の干渉軍隊によって、当時結成間もないソビエト政権というのはずたずたにされて、攻撃されて滅びたに違いないということはある程度判断して、いえるのではないでしょう。現に一つの証拠として、軍事反対派の有名な指導者のひとりであったスマイルガーは南方軍だったと思いま

すが、確かな南方軍の政治コミッサールとして前線へ出る。前線から帰ってくるという段階では正規軍主義に完全に転回しているわけです。今度はスミルガーはトロツキーを逆の立場から攻撃し始める。それはどういふことかといふと、トロツキーはどうしても赤軍が必要であるという立場は絶対にくずさなかった。正規軍がなければ労働政権は滅びるという態度をとったわけですが、しかしながら正規軍というものが、まさに次の段階で再度民兵へ引き戻さなければいけないのであり、民兵こそが真の意味でのプロレタリア権力の武装組織なのであるわけです。正規軍というものはまさに外国軍隊の干渉がある。それからして、やむをえない組織である。やむをえない過渡的な措置である。それは世界革命の進展というものによって干渉軍隊が滅び去り世界革命が成立し、反革命論というものは完全に地上からなくなっていく。そういう過程においては次第々々に民兵に取って替わられるべきであるという主張を一九二〇年ごろにいい始めるわけです。それに対してスミルガーは「かつては民兵主義だったわけですが、今度は逆に、いや、正規軍でいこう、という形での論争をふきかけるわけです。トロツキーと第十回大会で論争するというようなことがあつた。こうしたスミルガーの民兵主義から正規軍主義への転換、その最大の根拠というのは、つまり彼が前線から反革命軍と必死になつて戦つたという、そういう体験からあらわれているわけです。そういう意味では、内戦の時代に正規軍の方式をとつたとい

うのは決してあの当時の主張としては間違ひではなかった、ということがいえるのではないかと思います。しかしながら問題になるのは、やはりトロツキーは次第々々に正規軍というものを民兵に置き替えていく。民兵に置き替えていく一つの過渡的手段として彼は、五百万にふくれ上がった軍隊というのが次第に必要でなくなつてくるという段階で、労働者軍隊といひますか労働軍ですね、軍隊の労働化、労働の軍隊化をはかうとして、これまただいぶ論争が高くなつてくるわけです。そういうような路線というものを持って、それに対して、トロツキーが下級将校から引き上げて、赤軍の最大の指導者に仕立て上げられ、トハチエフスキー、ホルシーロフ、あるいはブジョヌ、その辺では正規軍主義に相当程度陥つたところの、そのための理由づけの一つとして、世界革命軍というのを考えるわけです。つまり世界革命本部というものをコミンテルンの指揮下におく、参謀本部というものをコミンテルンの直接指揮下におく。それはもうロシアというものなんか関係ない。ハンガリーで革命が起こればただちにハンガリーへ進撃し、ドイツで革命が起これば、ただちにドイツに進撃する。あるいは中国で革命の兆しが生ずればただちにそこにコミンテルンの指導、司令機関、そういう正規軍というものを断固としてつくらなければいかん。そういうトウハチエフスキーの見解というものは、国際革命軍本部というのはいふ有名でトハチエフスキーの現在彼は肅清されたあとに、名譽回復されているので簡

単な未完成品が出ていますが、それにもちゃんとその論文だけは入っています。そうした一方で正規軍主義、正規軍こそが重要であつてそれが最大の環だという形になつていく。トロツキーは再度、その政権というのを民兵の方向へもう一度持ち帰そうという努力を大体第十回大会あたりから始めるわけですが、ところがそれが完全に成功する前に、事実上彼は赤軍からはずされ、トウハチエフスキーとの闘争に敗れ、またスターリンとの闘争に敗れて、そういうものをしていく環というものを失うわけです。そういう意味では民兵への完全移行は達成されなかつたし、正規軍主義というのは延々と続いていくわけです。それでも決して民兵への移行がそうなされなかつたわけではなくて、大体二十年代の半ば頃の赤軍というのは、三〇%が正規軍で七〇%が民兵だったわけなんです。ところが二十九年ぐらになるとこの比率が逆転してくる。大体スターリンがほぼジュヘビネフ、カメネフそれからブハーリンあたりまで肅清してくるわけなんです。この段階で、正規軍七〇%民兵三〇%、民兵はもともと縮小されてくるわけなんです。完全な正規軍主義いわけゆる赤軍へと至つてくるわけです。この赤軍というのはどういふ状態であるかといふと現在みてみるとおわかりのように、決してあれが革命の軍隊であるといふ内実なんか持っていない。単なるソビエトといふ国家、ソビエトといふ名前そのものがちょっとおかしいわけですが、ソビエト国家、その執行権力の一部分としての軍事部門になつてい

にすぎない。そういう軍隊へと編成してしまつてしまふ。それがトロツキーの失脚のあとの問題となるわけです。以下の問題については、それ以後の問題については、もう一つには湯浅赴男氏の書いた「革命の軍隊」といふ本が、三一新書にあります。これはロシア革命以前の武装闘争にはほとんど触れていないんですが、大体赤軍論争、ブジアンタートトロツキー論争の以後についてはかなりよくまとまっています。またリベルハート、有名な軍事評論家ですが、リベルハートが書いた「赤軍」といふ本、それからペドロポフホワイト、あるいはグレビデルグといふた昔の赤軍の指導者の書いた「赤軍」などという本もありますので、これ以後の過程といふのはかなりよくわかると思います。そういう意味では、これから先は一応カットしたいと思ひます。

以上、一九〇五年の革命からその後のバルチザン戦争、そして一九一七年の二月から十月への革命、それ以後の内戦の過程といふものを極めて不十分ではあるんですが、軍事的な側面でもってみてきたわけです。つまりロシア革命といふものは軍事的な観点から見れば極めて多彩な闘争形態によって色どられていく。ある段階では民兵が主体となり、その段階ではバルチザンが正面に出る。ある段階では正規軍が正面に出るといふ形で、闘争形態といふのはさまざまあつて、それが時々の情勢に応じてですね、どれが主要なものとして正面にきつて出てくるかといふ形でもって闘争の形態が違つてくるわけです。つまり闘争形態といふのはある

一時期においてそれが唯一であるということではなくて時々政治戦術なり何なりに応じて、可能な幾つかの形態がある。その中から選出されるわけです。まさにプロレタリア革命の軍事問題というのは一時的に一つの形態でもってなされるものではない。バルチザン戦争ならバルチザン戦争でこれだけだという問題ではない。あるいは民兵なら、民兵、これだけだという問題ではない。そうした、その幾つかの可能な革命の側での闘争形態、軍事組織形態、その両者といっているわけですがそういうものの相互交換なり、あるいは一つのものもは主要なものとして前に出てくる、そういう形であるわけです。そういうものを固定して行く誤りというのには、一つには中国革命の初期の失敗であった。これは広東コミニオン、あるいは上海暴動、これは当時のコミンテルンのプロレタリア民兵路線というものを一義的に中国に導入し、事実上その力関係というのはプロレタリア民兵にとってはかえってマイナスのほうが大きいという段階でプロレタリア民兵路線を奪取する。ということによって広東コミニオンというのはまさに血の中でもって殲滅させられるわけです。上海暴動も、三回にわたる暴動も全部鎮圧される。このように一義的な闘争形態というのは存在しないのだ、武装闘争に関しては。みずからがいかに武装するか。また権力側の武装機関に対して、どう対峙するか、という点において、プロレタリア革命というのは常に幾つかの闘争形態というものを受縮してなきやいかん。さらにまた、それに加えてい

らば情勢に応じて、その時々主要な形態というのは何か。それを選択しなきやいかん、それはまさに政治綱領の問題になってくるわけです。それ以外の問題つまり闘争形態に対する受縮と、それがある段階において、どれが主要なものとして選択するかという問題これはまさにプロレタリア革命の軍事綱領の内容であり、つまりいってみれば政治綱領の軍事的側面の内容であり、軍事綱領の政治的側面の内容でもある。それ以外の軍事問題というのは、現在軍事問題という形で語られるのは大概において、それ以外の問題なんです。これは極言すれば、一切技術の問題です。現在風のことばでいいますと、それ以外の問題というのは、まさにパターン認識の問題になってくるわけです。蜂起にしても軍隊の問題にしても、いわゆる用兵術の問題、一切合切がパターン認識の問題なんです。昔の用兵術なり何なりの本を読みますと、現在でもソ連でも出されているし、いろんなところでも出されていますが、用兵術の基本というのは何かというと、要するに軍隊というの、二つの、当然のことながら、軍隊と軍隊が対峙する。その場合に相手はどういうパターンで次々動くかということがこちらに認識できるかどうか、その問題につきるわけです。相手がAというパターンを取る。それに対して自分がBというパターンを取る。相手がまた、自分がBというパターンを取るということを理解するから、相手はCというパターンを取る。それに対してこちらはBというパターンを取る。そういう形で、相手側の動きに

対する読みと、その読みに対して、自分自身がどういうふうに対応していくか、これもまた一つのパターンをなしているわけです。完全にその軍隊の用兵というものは幾つかのこのパターンがありまして、昔の軍隊つまり、戦国時代の軍隊の場合だと非常にそれがはっきりしていて、たとえば二つの軍隊がある関ヶ原なら関ヶ原で対峙する。その場合、さまざまの陣型があってその陣型をとる。相手がこういう陣型をとった場合には、どこを攻めれば、どこが一番突破できるか、あるいは打撃を与えることができるか。大体、陣型と、最初にとる陣型と次にそれをくずして、次に新しい陣型をつくって、そういうものに対する相手側とこちら側の読みでもって勝負はきまる。これは何もその当時の関ヶ原なり何なりの問題ではなくて、現在の軍事的な問題についても、ほぼそういうことがいえるわけです。たとえば完全な意味での軍事機構とはいえないかもしれませんが、機動隊なら機動隊というのは見ている限りでは一つの行動パターンといるのがあるわけです。その行動パターンというものを、こちらがどのように認識し、その行動パターンというものをこちらがどれほど新しい戦術でもって打ち勝っていくか。まさにそうしたパターン認識とパターン応用ですね、そういうのが大体において、軍事関係の技術的側面をなしているわけです。それ以外に、たとえば銃のうち方を習うとか、あるいは大砲の操作を習うとか、こういうようなのは全く些細な問題なんです。したがってロシア革命のほうからわれわれが学ぶ

べきものは、そうした、当然のことながら、用兵術の問題であって、われわれはそれを軍事史の中から拾い上げてわれわれのほうでもって習得しなければならぬ非常に重要な問題で、それなくしては軍事問題なんか語れないわけです。又、そうした軍事史の研究だけではなくて、ロシア革命というものの軍事問題というのは、まさに政治と軍事の完全に一体化された問題、つまり政治が闘争形態となり、ある闘争形態というものに対応して軍事形態が決まってくる。その軍事形態がまた、ひるがえってみれば、ある段階での戦術なり戦略なりというものに大きくはね返ってくる。それからして、つまり政治綱領の軍事問題、政治綱領の中の軍事問題であり、また軍事綱領の中の政治問題である。そういう微妙な相互連関みないなもの、そういうものをロシア革命の長い過程というものはわれわれに示してくれるわけです。まさにその残りのことは、一切合切が技術の問題である。つまりいままでのことを、大体において総括すればロシア革命というものは、第一段階においては、権力奪取の問題、においては前述のように、ストライキ、デモ、市街戦、暴動、そうしたかなり古典的な図式にのっとって行なわれる。これはバリコミニオンもそういう形で行なわれるわけです。ただし、十七年の二月革命がより大きな規模で行なわれたのは、バリコミニオンと違って、それをただちに地方の問題と結びつけ軍隊の動揺をはるかに大規模につくり出したという点にあったわけです。その次の段階として、民兵による武

装自衛が図られるわけです。その武装自衛を進める過程と平行して、軍隊の内部動揺をつくり出し、その一部分を革命の側に獲得する。獲得できない部隊に関してはこれを中立化する。そういう努力がはかられているわけです。そうしてつくられた民兵を核として第二段階での武装闘争いわゆる真の意味での革命権力の樹立、そういうものははかられていくわけです。その段階で、反革命側が組織的な攻勢に対して、攻勢に出てくる。ということに対しては民兵をさらに越えて、プロレタリアの正規軍というものを創出して、これに対峙するという方式が取られているわけです。このような方式というものが大体において取られる。ある段階では、それが途中で失敗し、長い潜伏期間がある。そうした蜂起と蜂起との間というものは、資金、あるいは武器の獲得、それからまた反革命に対する特別なテロル、あるいは武器なら武器の習得、訓練ですね、その訓練のための銃撃戦なり、バルチザン戦争がとられる。

以上のような構造というのが、一九〇五年から一九一七年、それからほぼ二〇年ぐらいに至るまでの、ロシア革命のかなり長期的にみた軍事的な構造であるということがいえるのではないかと思います。もちろん中国革命はこれとはかなり違った構造を持っています。すしその他の革命の構造というの、相当程度、違った革命の構造を持っているわけですが、われわれが都市での暴動、都市での武装蜂起というものを、第一義的に考えて、その前例とい

うのも、相当程度、違った革命の構造を持っているわけですが、われわれが都市での暴動、都市での武装蜂起というものを、第一義的に考えて、その前例というものを歴史の中にさぐる場合には、まず第一に、ロシア革命というのはわれわれの教訓の最大の源泉となるべきなのである。こうした、もちろん、僕が触れたのはロシア革命の軍事史の中でもある意味では一部分であって、特に組織的な面にか重点を置いていないわけですが、軍事問題というのは、これよりももう少し大きな広がりを持っているわけですが、しかしながらこうした形での研究というものが、今後もわれわれの側でもって行なわれていくべきだし、行なわれていけない限りでは、本当の意味でわれわれが軍事問題というのを現在われわれの課題として掌握しきれないという事態になってくるのではないかと、最後について、一応この話は終わりたいと思います。(丁)

※以上は、昨年一月二七日学術団EVE講演会シリーズでの山崎カヲル氏の講演内容です。山崎氏はラテンアメリカ経済研究家です。

## 傘下サークル紹介

### 貿易研究会

我々は、一般論的に言うならば、△現状―対象▽にマヒした没主体的な関わりではなく、明確なる意識性をもって積極的主体的に受けとめ真摯に問い詰めていくと同時に、△学問―科学▽の獲得を学問主体の確立を、究極的には△現代社会総体の解明▽を志向している。サークルは明確に大学講義の補完物として存在しているのではなく、大学の幻想性も完全に大衆的に暴露されている今日の状況下に於いては、唯一サークルのみが真に学問でできる場所であり、△現状▽を正確に(批判的に)促えることを可能にする場所的空間である。それ故、真に学問しよう科学しようとするものには唯一保証された場であり、自らをきたえ上げる場であると考える。また我々はサークルを△共同思考・共同創造▽の場として位置付けるのであるが、それは明確に△問題意識に於けるイデオロギー闘争▽の場であり、更には△サークル会員相互の問題意識と問題意識の激突▽の場でなければならぬ。現サークル状況はいわゆるサークル運動の△混沌と停滞▽が叫ばれている中において、我々のサークルも例外ではなく、至るところで危機の様相を呈している。だが我々はあくまでそれに解消することなく、まずは真摯に総括していくことによって、この危機から脱出

せんと試みている。そしてその実体化過程として具体的にはひとつには対象との関係性の明確化―問題意識性の鮮明化をもって、研究主体の形成、自的意識性の獲得を、そしてそのことは必然的に△理論と実践▽、その背後にある△科学とイデオロギーの問題の検討へと至らしめている。また我々はたえず現実に着した問題、日常生活から派生してくるイデオロギー(ブルジョアイデオロギー)に関与しているために、無意識的にせよ支配の論理へ収束されていく危険性にさらされている。科学性・客観性が問われる我々はいかなる観点にたつて、研究課題を追求していかねばならないのか、この問題を整理していくことが現在の我々の任務である。今日の状況を如何に主体的に獲得し物質化していくのか。現代社会総体の解明を射程に入れた科学的真理△批判の武器▽の獲得とその止揚過程は、前述の実体化過程を通じて、また戦後体制―ドル支配体制が崩壊した現局面にあって非常な流動過程にある現代資本主義の正しい認識と批判的検討を通じて獲得されるのである。そこで貿易論講座として年間テーマ△現代資本主義の構造分析▽に基づいて、様々の角度から、たとえば自由化問題・通貨問題・体制的合理化問題・後進国(東南アジア)資本輸出問題等々に取り組んでいる。そしてこの各個別領域と総体の領域との明確な関係性の上にたつて、課題を追求しているのである。また基礎講座に於いては、我々自身の問題△教育問題▽に焦点を合わせて、現教育体系そのものにメスを入れんとしている。とりわけ

緊密の問題として我々には田辺町移転一大同志社構想の問題があらう。

現サークルの運動の低迷は根源的本質的問題をかかえており、我々のサークルに限らず、サークル運動の再構築が模索されている。我々はこの混沌を抜け出す仲間と共に苦闘する仲間をそしてさらに言うならば、学問一科学しようと志向する仲間を求めている。

(BOX 別館3階)

## 経済研究会

「物質的な力は物質的な力によって倒されねばならぬが、しかし理論といえども、衆人を攪むやいなや、物質的な力となる。理論はそれが人に即して論証するやいなや、衆人を攪むことができるのであり、そしてそれはラディカルになるやいなや、人に即しての論証となる。」

マルクス 『ヘーゲル法哲学批判序説』

我々が研究会活動を推し進める過程に於て、常に問題となり、疑問とされる点は、研究会が不断に「お勉強会」へ転落する契機をもち、また実際転落しているのではないか、ということである。まさに、この点が前期活動期間中に於る我々の最大の問題点であった。さて、ここに言う「お勉強会」とは、研究対象と主体との

緊張関係を欠落させ、或いは現実社会との関係性に対する洞察を棄て去り、結果的には解釈学的な、知識量増大のための手段と化した「研究会」のことである。そして、この「お勉強会」の止揚

が決して容易でないことは、我々が前期活動期間を通じて、そしてまた現在も身をもって感ずるところなのである。研究会が、いわゆる政治的実践に継続されればそれで「お勉強会」は止揚される、などと言ってすむものでないことは明らかである(必ず、こういうことをぬかずバカ者がいるから、言ってみただけ)。ここで問われていることは、研究会活動に於て我々が、サークルとして何を獲得し、さらにそれを諸個人がどう還元してゆくのかということであり、それに立脚した上で、如何に解釈学を脱し、対象と主体との緊張関係を保ち、現実社会との関係性を実体化させてゆくかということなのである。

こうした「お勉強会」の止揚が果されなければ、目前に迫った△EVEV研究発表が如何に我々自身にとって屈辱的なものとなるかを我々は熟知している。すなわち、それは端初的には、一年間の研究成果を発表するという意志なくして、与えられた場をもてあまし、やむを得ずといった体で発表するという本末転倒となつて現われ、現実の発表時点では、数冊のテキストを理解・比較するだけにとどまり、結局幾つかの学説の紹介を我々の発表とするという結果に現われる。

我々のサークルは、自慰的な組織ではなく、不断に目的意

識的な組織へと上昇せんと志向していることを確認し、悪しき「お勉強会」を突破した、まさしく実体的な研究会活動を基礎とした△EVEV研究発表を為し遂げんことを切望している。一言でも、或いは一行でも自分たちの見解を発表する、△EVEVを真近に控えた我々の考えは、このことに集約される。

(BOX 別館4階)

## △同法会V

私たちが個別対象領域に向い、対象に埋没するなら、そのとき学問は解釈学としてしかその存在理由を持ち得ないであろう。又、サークルが学問の為にのみ存在し、その為の独立王国として自己完結するなら、そこには個別科学の理論的向上も、サークルの発展もないであろう。

私たちは、現実の歴史II社会に存在しているのであり、歴史II社会のあり方が私たちのあり方である以上、私たちの自由の条件は、その歴史II社会の運動の必然の認識と主体的実践である。

68、69年の全共斗運動を、最先頭に出て斗い敗北していったのは、他ならぬ私達のサークルの先輩達であった。残された私たちがとして、全ての活動・研究実践の原点は、まさに昭和27年同法会設立が戦前法学との訣別を告げ、「国民の為の法と法学」の確立であったのと同様に、あの未曾有の昂揚とそして敗北を経ての全共斗運動の歴史的意義と役割を総括することから始まる。

私たちの同法は、全共斗を経て再建される同法であり、全共斗を斗い敗北してゆく過程に胚胎してきた様々の諸矛盾こそ私たちのサークル員の存在根拠であり、活動を保証する全てである。

今日私たちは、サークルに対して固定化されたイメージを持たない。同法は運動体であり、その時代的問束の中で、どう現実の緊張に絶え変革の刃として自らを目的意識的に形成してゆく日が同法の常に保持して来た基本的態度であった。そして、かかる、緊張関係の内に構成される研究会と実践こそが、外的状況に食いつく原動となるのである。

私達の活動は、時として「サークルとしての域を出ている。」「政治ゴロだ」等の批判を受ける。しかし、私たちは、サークルの自立、謂んやサークル員諸氏の自立を何人も否定することは出来ないと考える。私達は、現代という時代を最大限に表現したい。未曾有の現代社会の諸矛盾を身を以て表現したい。その結果として、如何なる批判を受けようと、その批判が現実には依拠している限りに於て、更なる大批判を以て答えてゆくだろう。

再建同法が、かかる意味に於て、全ゆる矛盾の集中したサークルであることを自負すると同時に、法領域の諸矛盾を具現化することが今日の私たちの第一の使命であると考えている。

大言壮語を語る余裕は今の私たちには無い。ましてや、机上の遊戯に身を任せる余裕は無い。日々の緊張の内に、強靱な論理を獲得し、主体的実践にと自己を確立してゆくという志向性が常に

維持されてゆく限りに於て、既に私たちのサークルは着々とその  
任務を果たしつつあると確信する。

△BOX  
別館5階▽

昭和47年10月10日発行

学術団団報 再刊1号

発行 同志社大学学術研究団

発行人 井坂豪男

印刷 株式会社正文堂



## 学術研究団傘下研究会一覽

経 済 研 究 会

商 学 研 究 会

学 生 経 営 研 究 会

中 小 企 業 研 究 会

貿 易 研 究 会

法 学 研 究 会

同 法 会 研 究 会

社 会 科 学 研 究 会

政 治 学 研 究 会

婦 人 問 題 研 究 会

歴 史 哲 学 研 究 会 ( 雄 弁 会 )

古 美 術 研 究 会

現 代 中 国 研 究 会 ( キ ャ ラ バ ン )

教 育 科 学 研 究 会 ( ユ ネ ス コ )

フ ラ ン ス 文 学 研 究 会

文 学 研 究 会

ド イ ツ 文 学 研 究 会

速 記 研 究 会

珠 算 研 究 会

会 計 学 研 究 会

朝 鮮 文 化 研 究 会

化 学 研 究 会

機 械 研 究 会

電 氣 研 究 会

国 際 事 情 研 究 会

唯 物 論 研 究 会

ラ テ ン ・ ア メ リ カ 研 究 会

考 古 学 研 究 会

英 会 話 E ・ S ・ S

J434